

# 企業家活動プロセスをめぐる諸研究をマッピングする

——経営研究における影響力のある文献のシステマティック・レビュー——

関 智 宏

- I はじめに
- II 方法－経営研究における企業家活動プロセスにかかる論文のマッピング－
  - II-1. データの収集と選定
  - II-2. 影響の大きい関連文献の追加
- III 結果－引用マッピングへの落とし込み－
  - III-1. 刊行年ごとの論文数の推移と掲載されたジャーナルの傾向
  - III-2. 引用マッピング
- IV 企業家活動プロセス研究の展開
  - IV-1. 誰が企（起）業家で誰が企（起）業家でないのか
  - IV-2. 組織としてのアントレプレナーシップ
  - IV-3. 起業機会の発見・評価・活用プロセス
  - IV-4. 起業機会を発見する－認知、知識、学習、意図からのアプローチ
  - IV-5. 起業機会を創造する
  - IV-6. 企業家活動プロセスの全体把握
  - IV-7. 認知的視点による研究展開のその後
  - IV-8. エフェクチュエーションと起業行為
  - IV-9. 実践からのアプローチ
- V ディスカッション
  - V-1. 発見事実
  - V-2. 貢献と課題
- VI まとめ－小結に代えて－

## I はじめに

アントレプレナーシップ (entrepreneurship) をめぐってはこれまで多様な議論が展開されてきたが (たとえば, Low and McMillan 1988; Frank and Landström 2016), 近年, あらためて注目され, かつその中心的なトピックになりつつあるのが, プロセスとしてのアントレプレナーシップ (entrepreneurship as process) である (Chiles et al. 2007; 2017; McMullen and Dimov 2013; Moroz and Hindle 2012)。アントレプレナーシップの研究展開のなかで, プロセスは主要な視点となってきただけでなく (Gartner 1985), 今後の研究の焦点の1つ (Low and McMillan 1988), あるいは最も重要な方向性の1つ (Eckhardt and Shane 2003) と言われてきた。

アントレプレナーシップは, 端的に言えば, 個人や組織 (チーム) が事業を新規に起

こしていくことである。しかしその研究の進展とともに、諸概念の対象領域は拡がりを見せてきている。かつてアントレプレナーシップは日本語で起業家精神と訳出されてきたし、いまでもそのように認識されている側面があるかもしれない。しかしアントレプレナーシップをそのような意味でしか把握しないことは、アントレプレナーシップ研究のこれまでの展開を軽視してしまいかねない。

アントレプレナーシップ研究におけるプロセスをめぐっては、これまでいくつかの概念で表現されてきた。具体的には、プロセスとしてのアントレプレナーシップのように、アントレプレナーシップを名詞として使われる場合や、アントレプレネリアル・プロセス (entrepreneurial process) のように形容詞として使われる場合がある。このようにアントレプレナーシップの用語自体、その使われ方は多様である (McMullen et al. 2020)。最近では、さらに動詞としての使用を強調し、アントレプレナーシップを動詞としてアントレプレネリング (entrepreneuring) ととらえる研究も増えつつある (Goss et al. 2011; Steyaert, 2007)。

これらアントレプレナーシップ研究におけるプロセスに関連した諸概念は、これまでさまざまな場面で使用されてきたが、プロセスの捉え方が異なるにもかかわらず、どのようなテーマでおもにどのようなことが議論されてきたかについて、日本国内はおろか、国際的にも、これまで系統だったレビューに基づいて説明されていないと考える。そこで本研究では、経営研究における学術領域のなかで、アントレプレナーシップのプロセスに関連した諸概念を中心的に使用した、影響の大きい論文を抽出し、それを体系的にレビューすることで、研究がどのように展開されてきたかを説明していく。本研究をつうじて、企業家活動プロセスをめぐるアントレプレナーシップ研究がどのように進展してきたかが明らかにされるだけでなく、その進展のなかで、企業家活動プロセスをめぐるアントレプレナーシップの意味やその捉え方がどのようなものであるかが明らかにされる。

なお本研究では、プロセスをめぐるアントレプレナーシップという場合に、上で示したように、その対象となるプロセスとしてのアントレプレナーシップ (entrepreneurship as process)、アントレプレネリアル・プロセス (entrepreneurial process)、そしてアントレプレネリング (entrepreneuring) といったそれぞれの概念を包括する意味で、企業家活動プロセスという表現をもちいることにする。この理由は、1つには、もとはアントレプレナーが誰かということから研究が深化していくが、アントレプレナーの日本語の訳語を企業家とするか起業家とするかといったことを考えた場合には、日本では起業という用語がゼロベースからのスタートアップに限定される印象がありえることから (必ずしもそれ自体を否定しているわけではない)、現存の企業もその対象であるという意味で企業家としている。その意味で、アントレプレナーという用語を単独で使用する場

合には、その訳出を企(起)業家としている。2つには、企(起)業家個人の属性よりもむしろ行為(action)自体(事業を新規に起こしていくこと)を強調するために、企(起)業家に活動という表現を加えた。なお、行為プロセスという表現でなく、活動プロセスとしたのは、行為(action)という用語にプロセスという意味が内包されるためである<sup>1</sup>。3つに、企業家活動のように、企業活動に「家」を加えたのは、企業家は社会のなかでのアクターであり、社会との相互作用の起点としてみる(つまり、企業家が社会に影響を与え、社会が企業家に影響を与える)ためである。以上の諸点は、後のレビューのなかでも指摘される。

本研究の構成は以下のとおりである。第Ⅱ節では、企業家活動プロセスに関連した文献のシステマティック・レビューを行うための、本研究の検討対象の選定の方法を説明していく。具体的には、キーワードなどによる論文の収集に加えて、収集した論文のデータベースを基に行った引用分析の方法について説明する。第Ⅲ節では、引用分析の結果として、記述統計的な結果に加えて、引用マッピングとして論文引用の系統図を示すことで、本研究の検討対象を絞り込む。第Ⅳ節では、論文引用の系統図をもとに、システマティック・レビューを行っていく。具体的には、系統図をもとにし、かつ内容の類似性を考慮しながら、9つのテーマ・クラスターを導出していく。第Ⅴ節では、ディスカッションとして、企業家活動プロセスをめぐる論文のシステマティック・レビューから明らかになった発見事実をまとめるとともに、本研究の意義と課題を指摘する。第Ⅵ節は、本研究のまとめである。

## Ⅱ 方法

### －経営研究における企業家活動プロセスにかかる論文のマッピング－

科学的知識の成果が広く知られるための手段の1つは文献の公表である。広範囲の領域にまたがって数多く存在する文献のなかで、おもな領域を特定するためには、文献を体系的にレビューする、すなわちシステマティック・レビューを行う必要がある(Kraus et al. 2014; Xi et al. 2015)。システマティック・レビューは、恣意的に検討対象の文献を恣意的に選択する方法と異なり、透明性があり、かつ再現性があることを確認することができるために推奨された方法として知られている。(Liñán and Fayolle 2015; Pittaway and Cope 2007; Tranfield et al. 2003)。

1 Oxford Learner's Dictionaryによれば、行為(action)とは、'the process of doing something in order to make something happen or to deal with a situation' というように何かを起こすため、あるいは状況を取り扱うために何かをするプロセスを意味する。なお行動(behavior)とは、'the way that somebody behaves, especially towards other people' というように振る舞いを意味する。本文中に行動という表現が使っている箇所があるが、その意味合いは行為に極めて近い。

システマティック・レビューのためにもちいられる分析方法が、書誌学 (bibliometrics) の1つの手法として引用分析である (Liñán and Fayolle 2015; Xi et al. 2015)。引用は、科学的なアイデアの概念的な相互関係を可視化するものであるとされている (Garfield 1979; Small 1978)。引用分析を行うことによって、引用と引用された著者や出版物との関係や、分析に用いた出版物のなかで、どの引用元が影響が大きいかを明らかにすることができる (Gundolf and Filser 2013)。

そこで本節では、膨大に増加するアントレプレナーシップ研究のなかで、企業家活動プロセスに関連した文献のシステマティック・レビューを行うための、本研究の検討対象の選定の方法を説明していく。具体的には、キーワードなどによる論文の収集に加えて、収集した論文のデータベースを基に行った引用分析の方法について説明する。

## II-1. データの収集と選定

レビュー対象となる論文を収集するにあたって、Clarivate社の分析ツールであるWeb of Science™のプラットフォーム (Version 5.35) を活用した。Web of Science™では、いくつかのキーワードを入力して文献を検索するが、ここでは企業家活動プロセスを体現するものとして、entrepreneurial process, entrepreneurship as process, entrepreneringの3つをトピックのキーワードとし、いずれかを含む文献を検索した。なお、entrepreneurial processのようにキーワード欄に2語以上を並べて入力すると、entrepreneurialとprocessのそれぞれを含む文献を検索することになる。ここでは、entrepreneurial processを専門語句として抽出するために、“entrepreneurial process”のように用語の前後に「 ”」を挿入し検索した。検索は、2020年12月24日に行った。

Web of Science™では、いくつかの条件を指定することで検索結果を絞り込むことができる。そこで、Web of Science™内の分野を、BUSINESSとMANAGEMENTの2つとした。この意味で本研究では、検討する対象を経営研究としている。さらにドキュメントタイプをARTICLEとBOOK CHAPTERの2つとした。システマティック・レビューの対象には、「検証済みの知識」としてのジャーナル論文のみとする場合があるが (Podsakoff et al. 2005)、アントレプレナーシップ研究、とくに企業家活動プロセスをめぐる新興領域であるとみなされてきた時期には、書籍にも論文が掲載されてきたことが多くあったため (たとえば、Hjorth et al. 2003; McMullen and Shepherd 2003; Sarasvathy et al. 2003 など)、本研究の検討対象にBOOK CHAPTERも加えることにし、ARTICLEも含めて本研究ではこれらを総称して論文と呼ぶ。

Web of Science™を使って論文を検索した結果、407本の論文が抽出された。この論文データをマークリストに保存し、引用文献も含めるようチェックしたうえでエクセルデータとテキストデータに落とし込んだ。そのなかでの論文の重複は1本であった。こ

の重複 1 本の論文を削除した 406 本の論文データを分析していくために、引用分析のソフトである HistCite™ (Version 12.03.17) にテキストデータを変換した<sup>2</sup>。その結果、403 本の論文が取り込まれたが、理由は定かではないが 4 本の論文を取り込むことができなかったために、これら 4 本の文献は手動で入力した。

## II-2. 影響の大きい関連文献の追加

上の entrepreneurial process, entrepreneurship as process, entreprenering の 3 つのいずれかのキーワードを含んでいない論文は、検索対象から外れてしまうため、3 つのいずれかのキーワードは含んでいないが、これらのキーワードを使った論文に強い影響を与える文献を含める必要がある。そこで、HistCite™ の Cite Reference 機能を使い、被引用件数 (レコード) が「21」以上の文献を含めることにした。レコードを「21」にした根拠の 1 つは、初期の論文リストにも含まれ、かつアントレプレネリング (entreprenering) を中心に理論的考察を行っている Johannisson (2011) (表中 36 番) を含めるためである。また、本研究では、検討対象を論文に限定するため、書籍の文献 (表中 7 ~9 番, 22 番, 28 番, 37 番) は含めなかった。また、影響は大きいですが、方法論の論文 (表中 8 番) や、明らかに経営研究ではないと判断した論文 (表中 29 番および 32 番) は対象から外した。このうえで、初期のリストに含まれていなかった 22 本の論文を含めることにした。そこでこれら 22 本の論文を、Web of Science™ のマークリスト上で、また一部の論文については HistCite™ にて手動で追加し、最終的に検討対象となる論文は 428 本となった。なお、理由は定かではないが、HistCite™ にて手動で追加した 4 本の論文の参考文献が、収集した論文リスト内での引用 (TLCs) を完全に反映しておらず、引用分析ができていないことを指摘しておく。

---

2 HistCite™ (Version 12.03.17) を使用した PC の OS は Internet Explorer (IE) の (Version 11) であるが、HistCite™ を動かすためには、IE の設定にあるインターネットオプションのなかで、「セキュリティ」→「信頼済みサイト」の「Web サイト」に「http://localhost」を追加し、かつ「接続」→「LAN の設定」のなかにあるプロキシサーバーにアドレス「127.0.0.1」ポート「80」を追加し、さらに変換するテキストデータの冒頭にある「FN」を「Clarivate Analytics Web of Science」から「Thomson Reuters Web of Knowledge」に変えなければならない。

表1 検討対象として追加する文献リスト

	著者	刊行年	ジャーナル/書籍名	被引用数
1	Shane and Venkataraman	2000	Academy of Management Review	126
2	Sarasvathy	2001	Academy of Management Review	68
3	Shane	2000	Organizational Science	55
4	Davidsson and Hoang	2003	Journal of Business Venturing	47
5	Gartner	1985	Academy of Management Review	47
6	Ajzen	1991	Organizational Behavior and Human Decision Processes	42
7	Shane	2003	A general theory of entrepreneurship: The individual-opportunity nexus	41
8	Eisenhardt	1989	Academy of Management Review	40
9	Schumpeter	1934	The Theory of Economic Development: An Inquiry into Profits, Capital, Credit	40
10	Steyaert	2007	Entrepreneurship and Regional Development	40
* 11	Venkataraman	1997	Advances in Entrepreneurship, Firm Emergence and Growth	39
* 12	McMullen and Shepherd	2006	Academy of Management Review	37
13	Baker and Nelson	2005	Administrative Science Quarterly	34
** 14	Ardichvili et al.	2003	Journal of Business Venturing	32
* 15	Gartner	1988	American Journal of Small Business	32
16	Krueger et al.	2000	Journal of Business Venturing	31
17	Bird	1988	Academy of Management Review	30
18	Welter	2011	Entrepreneurship Theory and Practice	30
19	Alvarez and Barney	2007	Strategic Entrepreneurship Journal	29
** 20	Eckhardt and Shane	2003	Journal of Management	29
* 21	Kirzner	1997	Journal of Economic Literature	29
22	Kirzner	1973	Competition and Entrepreneurship	27
23	Lumpkin and Dess	1996	Academy of Management Review	27
24	Baron	2008	Academy of Management Review	26
25	Hoang and Antoncic	2003	Journal of Business Venturing	26
26	Rindova et al.	2009	Academy of Management Review	26
27	Katz and Gartner	1988	Academy of Management Review	25
28	Knight	1921	Risk, Uncertainty and Profit	25
29	Granovetter	1973	American Journal of Sociology	23
30	Podsakoff et al.	2003	Journal of Applied Psychology	23
31	Carter et al.	1996	Journal of Business Venturing	22
32	Granovetter	1985	American Journal of Sociology	22
33	Linan and Chen	2009	Entrepreneurship Theory and Practice	22
34	Aldrich et al.	1986	The art and science of entrepreneurship	21
35	Cardon et al.	2009	Academy of Management Review	21
36	Johannisson	2011	Small Business Economics	21
37	McClelland	1961	Achieving Society	21

出所：筆者作成

注：表の左側にある「\*」印は、手動で追加したさいに引用マッピングへの落とし込みが十分にできなかった論文を、また「\*\*」印は、引用マッピングに落とし込みができなかった論文を指している。

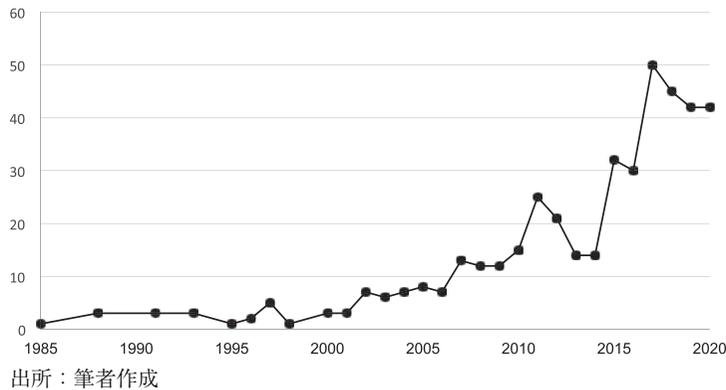
### Ⅲ 結果－引用マッピングへの落とし込み－

本節では、収集した428本の論文を対象に、HistCite™の諸機能を使った引用分析の結果を示していく。1つは記述統計的な結果であり、具体的には刊行年ごとの論文数の推移と、これらの論文が掲載されたジャーナルの傾向を示す。もう1つは引用マッピングであり、論文引用の系統図を示すことで、本研究の検討対象を絞り込んでいく。

Ⅲ-1. 刊行年ごとの論文数の推移と掲載されたジャーナルの傾向

本研究で収集した428本の論文の刊行年をみると、1985年から2021年までであった（2021年の論文は1本である<sup>3</sup>）。2021年に刊行された1本の論文を除いた427本の論文の公開動向を、刊行年ごとに図示したものが図1である。図1によると、2000年代に入ってから論文の数が次第に増え始め、毎年10本前後の論文が刊行された後、2011年にその数は急に増加し、25本の論文が刊行された。ここで最初のピークがあったことがわかる。その後いったん刊行数は14本と低迷したが、2015年には32本、また2017年には50本と、再度連続したピークがあったことがわかる。その後は、その数はやや落ち込んだものの毎年40数本で推移している。

図1 刊行年ごとの論文数の推移



これらの論文が掲載されたジャーナルの傾向についてみたものが、表2である。表2によれば、収集した論文がもっとも多く掲載されたのは、*Journal of Business Venturing* であり、その収録論文数 (Recs) は39本 (収録論文全体の9.1%) であり、*Entrepreneurship and Regional Development* が28本 (収録論文全体の6.5%) とこれに続いている。

ここで注視すべきことは、ジャーナルごとの引用の動向である。収録した論文内での引用を意味する TLCS (TLCS: Total Local Citation Score) と、収録した論文外かつプラットフォーム内での引用を意味する TGCS (TGCS: Total Global Citation Score) をみると、掲載論文数が1位の *Journal of Business Venturing* は、TLCSもTGCSもともに比較的その数が多いのに対して、たとえば3位の *Journal of Entrepreneurial Behavior & Research* は収録論文数 (Recs) は比較的多いものの、TLCSならびにTGCSはとも

3 検索日が2020年12月24日であるため、2020年末までに刊行されたいくつかの論文が含まれていないという意見があるかもしれない。そこで2021年1月2日にWeb of Science™にて同様に3つのキーワードで検索したところ403件の文献が抽出され、そのうち2021年刊行の文献が3つあった。2020年末までのWeb of Science™のプラットフォーム内での文献はすべてカバーされていると考える。

に比較的多くないことがみてとれる。一方で、9位の *Academy of Management Review* は、収録論文数 (Recs) は10本 (収録論文数全体の2.3%) に留まっているが、TLCS ならびに TGCS は、このトップ10以内の表内ではその数が最も多くなっている。他の論文で多く引用されるジャーナルはインパクトファクターが高いジャーナルとして、その影響は大きいことが広く知られている。

表2 掲載されたジャーナル

	Journal	Recs	Recs (%)	TLCS	TGCS
1	Journal of Business Venturing	39	9.1	247	10559
2	Entrepreneurship & Regional Development	28	6.5	66	1452
3	International Journal of Entrepreneurial Behavior & Research	21	4.9	13	176
4	Small Business Economics	21	4.9	36	604
5	International Entrepreneurship and Management Journal	20	4.7	8	300
6	Entrepreneurship Theory and Practice	14	3.3	100	4013
7	International Small Business Journal	14	3.3	25	736
8	Strategic Entrepreneurship Journal	12	2.8	52	1751
9	Academy of Management Review	10	2.3	424	14411
10	Journal of Small Business Management	9	2.1	20	630

注：プラットフォームの特性により、確認することができただけで、3位の *International Journal of Entrepreneurial Behavior & Research* は、「Behavior」が「Behaviour」のもの別々に、また7位の *International Small Business Journal* は、副題があるものとないものと別々に集計がなされているが、上の表では集計結果を統合していない。

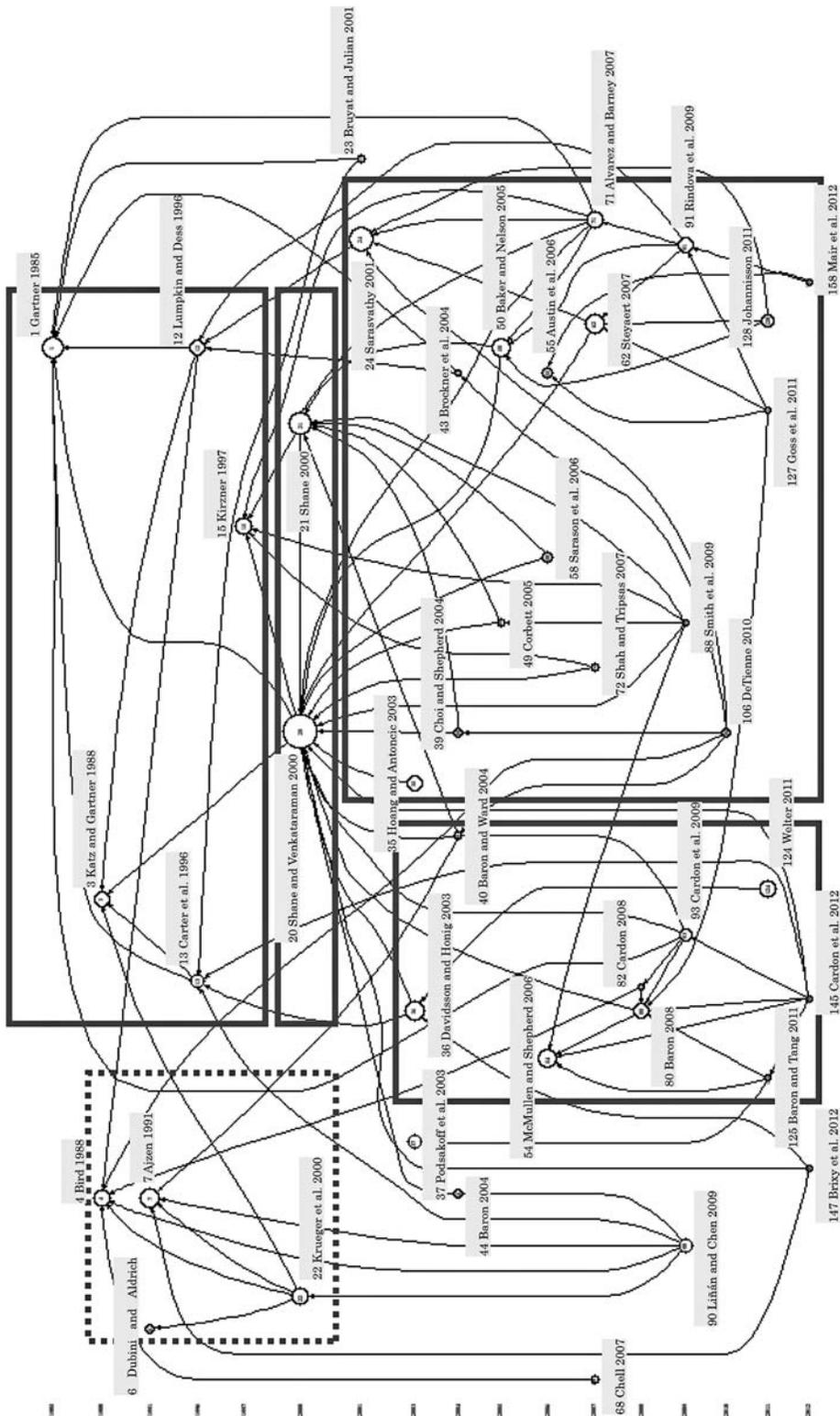
### Ⅲ-2. 引用マッピング

次に、HistCite™ のグラフ作成機能を使って、論文引用の系統図を示していく。本研究では、影響の大きい論文に焦点を当てる。ここでいう影響の大きさは、抽出した論文リスト内での相互引用の数 (LCS: Local Citation Score) の多さとする。そこでこの LCS の数を6以上 (つまり論文リスト内での相互引用の数が6以上) としたところ<sup>4</sup>、43本の論文が抽出された。これら43本の論文の刊行年は、1985年から2012年までであった。これを図示したものが図2である。この図2で示されたものを引用マッピングと呼んでいる。なお、手動で入力した論文4本のうち、1本については43本のリストに含まれたが、引用文献がデータ上に完全に反映されていなかったことに留意されたい (課題として末尾に指摘している)。また、残り3本については、理由は定かではないが、リストからも外れていた。

図中では、検討対象となる論文が結節点としてのノードで示されており、引用数が多いほど円が大きくなっている。また引用および被引用はそれぞれの円を線で結ぶリンクとして示されている。図2からわかるように、2000年代初頭に刊行されたいくつかの論文の引用数が非常に多く、その後刊行された論文に引用されていることから、2000

4 同様の方法で *resilience* をキーワードに引用マッピングを試みている Linneluecke は、LCS を5以上としているが、その根拠は説明されていない (Linneluecke 2017: 8)。

図2 引用マッピング (N=43)



注 : Nodes : 43, Links : 95  
 LCS> = 6 ; Min : 6, Max : 133 (LCS scaled)

年以前とそれ以降で分けて動向をみていく必要性が示唆される。

なお、検討対象として追加した影響の大きい論文のリストを示した表2のなかで、理由は定かではないが、引用数の比較的多い3本の論文がこの引用マッピングに図示されていない。そのため以下で論文のレビューを行うさいには、先立って指摘した1本の論

表3 検討対象となる文献リスト (N=46) 刊行年順

整理番号	管理番号	著者名	刊行年	ジャーナル	LCS	GCS
1	1	Gartner	1985	Academy of Management Review	52	1036
2	3	Katz and Gartner	1988	Academy of Management Review	29	505
3	4	Bird	1988	Academy of Management Review	33	891
4	6	Dubini and Aldrich	1991	Journal of Business Venturing	13	459
5	7	Ajzen	1991	Organizational Behavior and Human Decision Processes	44	28877
6	12	Lumpkin and Dess	1996	Academy of Management Review	29	3444
7	13	Carter et al.	1996	Journal of Business Venturing	24	395
8	15	Kirzner	1997	Journal of Economic Literature	33	
9	MAP 外	Venkataraman	1997	Advances in Entrepreneurship, Firm Emergence and Growth	39	
10	20	Shane and Venkataraman	2000	Academy of Management Review	133	4819
11	21	Shane	2000	Organization Science	58	1939
12	22	Krueger et al.	2000	Journal of Business Venturing	32	1706
13	23	Bruyat and Julian	2001	Journal of Business Venturing	9	269
14	24	Sarasvathy	2001	Academy of Management Review	70	1913
15	35	Hoang and Antoncic	2003	Journal of Business Venturing	26	1043
16	36	Davidsson and Honig	2003	Journal of Business Venturing	48	1820
17	37	Podsakoff et al.	2003	Journal of Applied Psychology	23	26651
18	MAP 外	Eckhardt and Shane	2003	Journal of Management	29	
19	MAP 外	Ardichvili et al.	2003	Journal of Business Venturing	32	
20	39	Choi and Shepherd	2004	Journal of Management	11	267
21	40	Baron and Ward	2004	Entrepreneurship Theory and Practice	9	144
22	43	Brockner et al.	2004	Journal of Business Venturing	8	213
23	44	Baron	2004	Journal of Business Venturing	11	435
24	49	Corbett	2005	Entrepreneurship Theory and Practice	9	375
25	50	Baker and Nelson	2005	Administrative Science Quarterly	36	1308
26	54	McMullen and Shepherd	2006	Academy of Management Review	37	
27	55	Austin et al.	2006	Entrepreneurship Theory and Practice	15	1298
28	58	Sarason et al.	2006	Journal of Business Venturing	14	262
29	62	Steyaert	2007	Entrepreneurship and Regional Development	41	257
30	68	Chell	2007	International Small Business Journal	10	331
31	71	Alvarez and Barney	2007	Strategic Entrepreneurship Journal	30	804
32	72	Shah and Tripsas	2007	Strategic Entrepreneurship Journal	10	286
33	80	Baron	2008	Academy of Management Review	27	565
34	82	Cardon	2008	Human Resource Management Review	6	121
35	88	Smith et al.	2009	Journal of Small Business Management	6	64
36	90	Linan and Chen	2009	Entrepreneurship Theory and Practice	22	833
37	91	Rindova et al.	2009	Academy of Management Review	26	263
38	93	Cardon et al.	2009	Academy of Management Review	21	549
39	106	DeTienne	2010	Journal of Business Venturing	11	189
40	124	Welter	2011	Entrepreneurship Theory and Practice	30	883
41	125	Baron and Tang	2011	Journal of Business Venturing	7	251
42	127	Goss et al.	2011	Organization Studies	7	63
43	128	Johannisson	2011	Small Business Economics	21	145
44	145	Cardon et al.	2012	Entrepreneurship Theory and Practice	7	196
45	147	Brixy et al.	2012	Journal of Small Business Management	6	35
46	158	Mair et al.	2012	Journal of Business Ethics	6	151

文について引用情報を完全に反映しきれていない点を考慮するとともに、マッピングに図示されていない3本の論文も検討に加えることで、分析プロセスにおける欠陥を補うことにする。あらためて述べるように、本研究で検討対象としたのは、マッピングに図示された43本の論文に加えて、何らかの理由で図示されなかった3本の論文を加えた46本の論文である。この最終的に検討対象となる論文リストをまとめたものが、次の表3である。表3をみてもわかるように、本研究では、引用数を基に検討対象の論文を抽出したために、検討対象となった論文の多くが、*Academy of Management Review* や *Journal of Business Venturing* などといったジャーナルのように、影響の大きいジャーナルに掲載されていることがわかる。なお、本研究では、46本の論文のなかでも、引用および被引用のリンクが比較的多く（おもに2以上）かつさらに影響の大きい（刊行年が新しいところまでリンクがつながっている）論文をおもな検討対象としてレビューを行う。ここでの目的はまさに先行研究の動向を回顧（レビュー）し、その内容を確認することにあるために、個々の内容について検討すべき諸点は多くあると考えるが、それは別稿に譲ることにしたい。

#### IV 企業家活動プロセスをめぐる諸研究の展開

本節では、前節で示した論文引用の系統図をもとに、システムティック・レビューを行っていく。具体的には、系統図をもとにし、かつ内容の類似性を考慮しながら (Kraus et al. 2014; Liñán and Fayolle 2015)、9つのテーマ・クラスターを導出していく。これらの9つのテーマ・クラスターは互いに排他的でまったく完全に独立したものではなく、それぞれが部分的に重複している内容もあることを指摘しておく。

##### IV-1. 誰が企（起）業家で誰が企（起）業家でないのか

アントレプレナーシップ研究の古典ともいべき諸研究をここで振り返る余力はないが、極めて単純に言えば、企（起）業家は、はたして一般の経営者と何がどのような点で異なるのか、すなわち、企（起）業家 (entrepreneur) と非企（起）業家 (nonentrepreneur) の違いの探求であった (Gartner 1985; Venkataraman 1997)。たとえば、本研究の検討対象の論文には含まれてないが、Webster は、1977年に *Academy of Management Review* に掲載された論文のなかで、企（起）業家の類型を行い、それぞれの類型に適した急成長企業のタイプを分類することを試みている (Webster 1977)。

企（起）業家と非企（起）業家との間の系統的な違いに関する実証研究は、長く続けられてきたが、その結果は全体的にまちまちであると評価されている (Low and MacMillan, 1988)。Busenitz and Barney (1997) は、この文献の広範なレビューの中で、企

(起) 業家が非企 (起) 業家と体系的に異なるかどうかについての証拠は、認知に関する研究を除いては説得力がないと結論づけている (Alvarez and Barney 2007)。認知心理学者の Baron が 1998 年に *Journal of Business Venturing* に発表した論文では、企 (起) 業家が遭遇しやすい条件 (高い不確実性, 新規性, 時間的プレッシャー, ストレス) により、企 (起) 業家は非企 (起) 業家に比べて、様々な認知ヒューリスティックやバイアス (利己的バイアス, 反事実思考など) をもちいて思考・推論する傾向が強いと述べられている。

企 (起) 業家はつねに企 (起) 業家であるというわけではない (Schumpeter 1934)。Gartner (1985) では、企 (起) 業家にもさまざまなタイプがあるだけでなく、企 (起) 業家になるためにもさまざまな方法があり、さらに企 (起) 業家が生み出す企業もさまざまであるという視点をもつことが重要であり、「平均的な」企 (起) 業家だけに焦点を当てるのではなく、急成長企業の成立におけるバリエーションを追求するべきであると主張されている (Gartner 1985)。それゆえ企 (起) 業家と言われる人たちが、どのようなときにどのようなかたちで新規に事業を起こしていくか、その行動へと焦点が移っていく。

#### IV-2. 組織としてのアントレプレナーシップ

企 (起) 業家個人ではなく、企 (起) 業家がけん引する企業を含めた組織のアントレプレナーシップの特徴をおもに検討した研究がいくつかある Lumpkin and Dess (1996) では、企 (起) 業家個人を企業とみなすという古典的な経済学の考え方と一致させるために、あえて企業/事業の単位レベルに焦点を当て、戦略立案プロセスの研究から得られた概念をもちいて (Covin and Slevin 1991; Miller 1983)、組織による主要な企業家活動プロセス、つまり新規参入がどのように行われるのかを説明する企業の起業志向 (EO: Entrepreneurial Orientation) が、一般の企業と区別するのに有効であるという指摘がなされている。<sup>5</sup>

ここでいう EO は、次の5つの要素から構成される。すなわち、自律性 (autonomy)、革新性 (innovation)、リスクテイク (risk-take)、先取性 (proactive)、競争力のある積極性 (competitive aggressiveness) の5つである。これらの要素は、戦略立案プロセスの観点から、Miller (1983) が提供した3つの諸点が有用な出発点とされている。Miller (1983) では、起業的な企業 (entrepreneurial firm) が製品市場の革新に従事し、やや危険な事業を引き受け、競合他社よりも先んじることから、「革新性」、「リスクテイク」、「先取性」の3つの次元で一般の企業と異なる特徴があるとしている。Miller

5 Lumpkin and Dess (1996) では、新規参入は、必ずしも新しい組織を作る必要はなく、個人から既存の組織まで、さまざまな企業や組織にまたがって起こる可能性があることも指摘されている。

(1983) は、その後の多くの研究に影響を与えており、たとえば Covin and Slevin (1989) では、敵対的で、良性の環境において企(起)業家が牽引する企業のパフォーマンスを調査するさいに、企業家活動(※原語は *entrepreneurial*) の構成要素として上の3つの要素が採用された。Lumpkin and Dess (1996) では、Miller (1983) で提唱された3つの要素に、自律性と競争力のある積極性の2つの要素を追加した。自律性は、スタートアップの企業が新しい試み始めるために必要な特定の行為を進めるための意図性 (Bird 1988; Katz and Gartner 1988) につながる自立心(誰かに頼らずに自分が主体的にやってみたいと考えること) である。競争力のある積極性とは、積極的な立場および強い競争をとまなうこと (MacMillan 1982) である。

Lumpkin and Dess (1996) によれば、これら5つの要素は企業家活動プロセスを理解するうえで重要な EO の構成要素である。しかし、多くの場合において、企業家活動プロセスがこれらすべての要素が高いレベルで見られる場合のみに限定して説明することは不十分であり、企業が追求する起業機会の種類によっては、これらの要素の組み合わせが異なる可能性があるという。

#### IV-3. 起業機会の発見・評価・活用のプロセス

企業家活動プロセスをめぐる、その後の研究展開に多大な影響を与えたのが、Shane and Venkataraman (2000) である。これは、Shane と Venkataraman が2000年に *Academy of Management Review* に発表した NOTE である (Shane and Venkataraman 2000)。そこでは、アントレプレナーシップが独自の経験的現象を説明・予測するものということに批判的な立場を示し、「アントレプレナーシップ」という広いレッテルの下に、様々な研究の寄せ集めが行われるようになってしまうことによる概念的枠組の欠如が問題視されている。とくに企(起)業家が誰かという点について、企(起)業家個人と機会の存在が結びついていることで不完全な定義を生み出してしまっていると指摘されている (Shane and Venkataraman 2000; Venkataraman 1997)。そこで、企(起)業家個人と機会の存在を切り離すことで、アントレプレナーシップを「将来の商品やサービスを生み出す機会がどのように、誰によって、どのような効果をもって発見され、評価され、利用されているのかを研究する」研究領域として位置づけ (Venkataraman, 1997)、その研究領域では、起業機会の源泉、起業の発見・評価・活用のプロセスと、起業機会を発見し、評価し、活用する個人との双方が研究されるとした (Shane and Venkataraman 2000)。

Shane and Venkataraman (2000) で指摘された諸点は、企(起)業家と非企(起)業家との違いを解明するために、企(起)業家個人の属性に焦点を当てがちであった研究の流れを、起業機会の発見・評価・活用のプロセスへと移行させることにつながった。

そして、企（起）業家の特性は安定したものでなくある状況に対応した結果であるということ、さらに企（起）業家個人だけでなく新しい組織の創造を含み（Gartner 1988; Lumpkin and Dess 1996）、そこに至るプロセスを解明していくこと、といった研究の方向性が示された。

#### IV-4. 起業機会を発見する－認知、知識、学習、意図からのアプローチ－

##### 企（起）業家個人と起業機会のネクサス

かつて Bird が 1988 年に *Academy of Management Review* において、企（起）業家の心理的要因としての意図（intention）をとりあげた論文を発表してから（Bird 1988）、起業機会の認知はアントレプレナーシップの分野では長い間中心的な概念であった。Kirzner（1979）などの例外を除いて、このテーマを認知的観点から検討する努力はほとんどなされてこなかったが（Baron 2004; Baron and Ward 2004）、2000 年前後には、認知心理学の研究者からの参入が相次ぎ、個人の中で起こる精神的プロセス（情報を獲得し、変換し、利用するための認知メカニズム（Baron 2004））がアントレプレナーシップのプロセスと関係しているという認知からのアントレプレナーシップ研究がいっそうの拡がりをみせた（Mitchell et al. 2002）。

起業機会の発見・評価・活用は、企（起）業家個人だけでなく新しい組織の創造に至るプロセスとして描かれたが、とくに注目されたのは、企（起）業家個人による起業機会の発見であった（Gaglio and Katz 2001; Shane 2003; Venkataraman 2003）。しかし機会はそのだとわかるかたちで存在しているわけではない。Shane and Venkataraman（2000）では、ある人が起業機会を発見する理由は、①機会を特定するために必要な事前に与えられた情報（Venkataraman 1997）を保有していることと、②機会を評価するために必要な認知的特性」を保有していることが必要であるという。このように Shane and Venkataraman（2000）は、企（起）業家個人の認知的特性と機会を識別し、開発し、そして利用する彼の能力の条件適応を検討するという分野を切り開いたと評価されている（Corbett 2005）。Eckhardt and Shane（2003）では、市場情報が不均衡に存在しているという視点から、企業家活動プロセスにおける起業機会の役割が論じられている。

起業機会を発見するという認知からみた諸研究は、その後、独自の発展を遂げていくことになる。ここで認知的な視点に立つ（cognitive perspective）（Baron 2004）というときには、起業機会を発見する企（起）業家個人が、機会を見る能力（すなわち認知）、あるいは機会を見たらその機会を開拓する能力が、他の人とは大きく異なることが前提とされている（Kirzner 1973; Shane 2003）。Baron（1998）と Mitchell et al.（2000）では、ある人は機会を認識し、他の人は機会を認識しないのに対し、ある人は認知処理の違いにより起業機会を認識するとされている。企（起）業家の認知の能力に違いがある

のは、世界全体の情報の断片が個々人によって異なるがゆえに (Hayek 1945), それぞれが異なる認知メカニズムやヒューリスティックに依存していると考えられているためである (Baron 1998; Busenitz and Barney 1997)。

このように、起業機会の発見をめぐるのは、認知の視点をめぐる諸研究が展開された。しかし Ardichvili et al. (2003) で指摘されているように、特定の要因に焦点を当てた結果、重要な他の要因を犠牲にして、個々の要因を深く研究することになってしまった。起業機会が発見される要因はさまざまであり、Ardichvili et al. (2003) では、企(起)業家個人の個人差と企(起)業家を取り巻く状況差が要因となりうると指摘されている。こうした指摘がなされた時期くらいから、起業機会の発見をめぐるのは、認知の視点からより多面的な研究展開の広がりを見せていくことになる。たとえば Baron (2004) では、成功した企(起)業家は、ヒューリスティックな思考と「前に進む」ための自分の好みを少なくともある程度管理できる人であるとし、精神的プロセスに関して個人差があることが、企(起)業家としての能力に影響を与える可能性があるとして主張されている。また Shane (2000) では、人々が知識の非対称性(われわれの知識のストックが異なるという事実)のために異なる機会を認識しているという。これらの知識の非対称性が生じる理由について、Corbett (2005) や Ward (2004) では、知識ストックの違いや各個人が自分の知識をどのように創造的に処理し、利用するかが、発見できる機会に影響を与えるためであるとし、知識のストックだけでなく、知識の利用の仕方の違いが強調されている。これらのなかでも Corbett (2005) では、個人がどのように学習しているか、また学習の方法の違いが機会の特定と活用にどのような影響を与えるかが考慮されなければならない、学習の非対称性という観点から、個人の学習の違いがあることが強調されている。

さらに Krueger (2000) では、ある人の起業という行動に至る前の前兆としての起業意図 (entrepreneurial intention) がとりあげられ、意図は、われわれが機会を特定するプロセスと、その結果として生じる行動をどのように策定し、実行するかのモデル (Ajzen 1991) が検討されている。後に McMullen and Shepherd (2006) でも引用された Greve (2001) では、行為 (action) は、定義によって、意図的な行動 (behavior) であることが示唆されている。意図の強さから始まり、その後に意図した行動が起こるかどうかを予測するという視点に立てば、起業機会と起業意図とが同義になるという。Brixy et al. (2012) では、大規模データから、起業に至る前段階に、学習プロセスに加えて起業するかしないかの自己選択プロセスがとられることが実証的に説明されている。

このように、起業機会の発見という観点に立てば、認知、予備知識、学習、意図などが企業家活動プロセスにどのように寄与しているかが明確に示されることになる。アン

トレプレナーシップの研究領域を、企（起）業家個人と起業機会（I-O; Individual Opportunities）の結びつき（I-O ネクサス）として再認識することで、起業機会の役割や起業機会が企業家活動プロセスにどのような影響を与えるかに注目が集まるようになってきたのである（Smith et al. 2009）。しかしこれらは、あくまで企（起）業家個人の個人差の重要性を指摘したものであった。

#### 起業機会を企（起）業家個人から切り離す

個人がどのように起業機会を見極め、活用するかについては、非常に多くのことを理解するのに役立つとの指摘もある（Corbett 2005）。しかし企（起）業家個人と起業機会とが結びつく、I-O ネクサスとして認識されているために、プロセス上その後に展開される起業機会の活用など企業家活動プロセスに与える影響が、企（起）業家個人かそれとも起業機会かのどちらから強く影響を受けるのかは必ずしも定かではない。影響力の大きな論文の1つである Venkataraman（1997）では、企（起）業家個人と起業機会とを切り離して検討することの必要性が指摘されていたが、あらためてその切り離しの必要性が指摘されてくるようになる。つまり、企（起）業家個人ではなく、起業機会に関する相対的な違いの重要性に焦点を当てることで、起業機会そのものの違いが、企業家活動プロセスのパターンの一部を説明するというものである（Shane 2003: 18; Smith et al. 2009）。Smith et al.（2009）では、企（起）業家個人と起業機会との結びつきを切り離し、ナレッジ・マネジメントの分野を参考にして、起業機会の暗黙性の大きさの違いに注目し、この違いが機会の特定のプロセスの違いを生み出すとしている。

ここでは、「暗黙性」と「成文化」の区別をもちいて、起業機会の性質（すなわち、暗黙性の程度）によって、起業機会が体系的な探索や発見（Shane 2000）のプロセスを経て特定されるかどうか、また、事前知識の重要性が影響を受ける可能性があることが示唆されている。この類型論は、異なるタイプの起業機会が、探索モデルと発見モデルという異なるタイプの機会識別プロセスをつうじて識別されることを示唆している。探索モデルと発見モデルを区別する重要な点の1つは、探索の対象（すなわち機会）がどの程度明確になっているかということである。ここで強調するのは、暗黙性の程度の高い起業機会の場合には探索モデルのタイプをつうじて起業機会が識別されるということである。しかし Smith et al.（2009）では、起業機会の暗黙性の大きさにかかわらず、起業機会が企（起）業家の「外」に客観的に存在していることを自明なものとして位置づけられている。実際、Smith et al.（2009）では、Kirzner（1997）、Shane and Venkataraman（2000）、Shane（2000）、さらに Corbett（2005）といった研究が引用されており、これらの研究の延長線上に位置づけることができる。

#### IV-5. 起業機会を創造する

このような考え方に対して、起業機会そのものが客観的に存在することを前提としない考え方がある。これが、起業機会の発見の論理に対する、起業機会の創造の論理である。起業機会の創造は、企（起）業家が機会を形成し、活用するためにとる行動を説明するための発見の論理に代わる論理とされている（Aldrich and Kenworthy 1999； Alvarez and Barney 2007； Gartner 1985； Venkataraman 2003）。この創造の論理は、たとえば、Gartner（1985）では、企（起）業家がどのような急成長企業を成立させていくかは、「万華鏡」のように極めて多様なパターンが存在すると指摘されるように、さまざまな研究者によって説明されてきた（Alvarez and Barney 2005； Baker and Nelson 2005； Casson 1982； Gartner 1985； Sarasvathy 2001； Schumpeter 1934）。

なかでも Alvarez and Barney（2007）では、起業機会の創造の論理は、発見の論理と異なり、単一の首尾一貫した論理として明確化されていないとしながらも、人間の行動にかんする目的論（テレオロジー）の3つの仮定、すなわち①人間の目的の性質に関する仮定、②個人の性質に関する仮定、③個人が活動する意思決定の文脈の性質に関する仮定、を踏まえると、起業機会の形成には、発見と創造という2つの排他的でない代替可能な論理が存在しており、それぞれが企（起）業家の機会を形成したり、活用したりする能力に影響を与えると主張されている。Alvarez and Barney（2007）で引用されている Sarasvathy（2001）ではエフェクチュエーション（effectuation）として、また Baker and Nelson（2005）ではブリコラージュ・レスポンス（bricolage response）として、それぞれ独自の研究が展開されるなど、創造の論理を前提としたこれらの諸研究は、その後の企業家活動プロセスにかかる研究展開に大きな影響を与えていくことになった。

#### IV-6. 企業家活動プロセスの全体把握

起業機会の発見にせよ創造にせよ、どちらの論理も企業家活動プロセスにおいて起業機会がどのように形成されるかに焦点を当てている。しかし企業家活動プロセスは起業機会の形成に留まらず、その後に機会活用へと展開していくことが暗黙裡に想定されている（Shane and Venkataraman 2000）。しかしながら、Choi and Shepherd（2004）でも指摘されるように、企業家活動プロセスのなかで起業機会の活用を開始するかどうかの決定に焦点を当てた研究はほとんどない。Choi and Shepherd（2004）では、起業機会の活用（opportunity exploitation）に焦点が当てられ、Alvarez and Busenitz（2001）に倣って資源ベースの観点から、企（起）業家は、新製品に対する顧客の需要に関する知識が豊富で、必要な技術が十分に開発されていて、経営能力が高く、ステークホルダーの支援が大きいと認識している場合に、ビジネスチャンスを開拓する可能性が高いと指摘さ

れている。

起業機会の活用についての研究はほとんどないが、それでいても、起業機会の発見／創造、またその活用は、企業家活動プロセスといっても、急成長企業が成立していく観点からみれば、プロセス全体の初期段階に焦点を当てたものである。Reynolds and White (1997) では、企業家活動プロセスは、4つの異なるフェーズ、すなわち、受胎期（人口全体）、懐妊期（起業したての個人）、乳児期（組織化されつつある企業）、青年期（確立した企業組織）で構成されていることが示唆されている。これらのうち、受胎期と懐妊期は、あくまで企業家活動プロセスの初期段階であり（Cardon et al. 2005）、新興のアントレプレナーシップ（nascent entrepreneurship）と呼ばれる（Reynolds and White 1997）。また初期段階に留まらず急成長企業の成立まで議論を進めた研究は一部あるが（Korunka et al. 2003）、そうした企業が成立した時点でプロセスが終わってしまっていると言われる（DeTienne 2010）。

DeTienne (2010) でとりあげられるように、プロセスは「最終目的に至るまでの一連の行動や操作のこと」（Gove 1986:937）との指摘からすると、企業家活動プロセスは、急成長企業の成立以上のものを含むことが示唆される（Brockner et al. 2004；Cardon et al. 2005；DeTienne 2010）。たとえば Brockner et al. (2004) では、急成長企業が成立した後に、成熟、更新と成長、また衰退のいずれかに続くことで、直線として説明できないプロセスが描かれている。また、DeTienne (2010) では、急成長企業の終焉が指摘されており、そのプロセスは創造ではなく企（起）業家の出口で終了することが提案されている。具体的に DeTienne (2010) では、株式非公開の企業の創業者がどのように撤退の意思決定をし、撤退戦略を策定し、撤退のための選択肢をどのように用意しているのかが調査されており、企業の創業者は出口を理解し、そのコンセプトを事業計画に盛り込む必要があると指摘されている。

#### IV-7. 認知的視点による研究のその後の展開

企業家活動プロセスは、急成長企業の成立以上のものを含むものであるとして、DeTienne (2010) では、企業の撤退までも企業家活動プロセスに含めることが提案されたが、急成長企業の成立（あるいはその結果としての富の創造）以外に異なる展開がみられた。それは、認知心理学者の Baron や Cardon らによって展開されたものであり（Baron and Tang 2011；Cardon et al. 2009；2012）、そもそも企（起）業家がなぜ起業しようとしたか、企（起）業家個人の起業にかかる心理的側面に焦点を当てた研究の展開である。

なかでも Cardon et al. (2009) では、企（起）業家個人が有する起業への情熱（entrepreneurial passion）の重要性が指摘されている。これまで情熱は、企（起）業家の理性

を曇らせるという見解が示されてきた。たとえば, Shane and Venkataraman (2000) では, 情熱に関連した感情である楽観主義は情報を制限し, バラ色の予測を導き, 理性(先に行動し, 後から考える)を阻害すると主張されている。また Baron (2008) においても, ポジティブな感情があると, 適切な機会を探すことに関して早々に辞め, 実際には, 特定の企(起)業家にとって(スキル, 経験, 動機などの特定の配列を考慮して)活用するのに最適ではない起業機会を受け入れることにつながる可能性が指摘されている (Baron 2008; McMullen and Shepherd 2006)。Shane and Venkataraman (2000) では, 企(起)業家は楽観主義に陥らないためにも, 起業機会を有効に活用するためには, 企(起)業家の理性に基づく意思決定の優位性が強調されている。

このような見解に反し, Cardon et al. (2009) では, 企(起)業家の情熱は自己アイデンティティにとって重要な役割であり, その役割に関連した起業活動を行うことで意識的に経験する強烈なポジティブな感情に対応すると指摘されている。Cardon et al. (2009) の指摘は, 企(起)業家の真の自己概念の検証と肯定に由来する本質的な動機があり, それによって本物の情熱が活性化されるために, 企(起)業家の役割を富の創造と最大化という道具的な目標に動機づけられているとするアントレプレナーシップ研究を覆している。また Cardon et al. (2012) では, 起業の感情 (entrepreneurial emotion) がとりあげられ, アントレプレナーシップは感情の旅であり, 企業家活動プロセスの前兆, 進行中, そして結果, 全体にかかわると指摘されている。

Baron (2008) によれば, 感情 (affect) は, 企(起)業家の新たな機会認識につながる創造性を高め, プロセスに影響を及ぼすという。また Cardon et al. (2012) では, ポジティブな感情は「すべてがうまくいっている」というサインであり, 現在の状況に深刻な脅威や危険はないという。しかし, このような感情的労働が企業家活動プロセスをどのように形成するかのエビデンスはあまりないと指摘もある (Cardon et al. 2012)。Baron (2008) では, 感情と企(起)業家個人の機会認識に焦点が当てられていたが, その後, Baron and Tang (2011) では, 企(起)業家個人のポジティブな感情 (affect) が, 企業レベルのイノベーションの創出に重要な役割を果たすことが指摘されている。また Ward (2004) では, 企(起)業家個人の感情は組織成員の創造性に寄与する可能性があるという (Ward 2004)。さらに, Cardon (2008) では, 企(起)業家もつ情熱のようなポジティブな感情は, 従業員にも伝染するという感情の伝染モデルが提案され, さらにこの感情は従業員以外にも, 投資家など主要なステークホルダーへの伝染の可能性も指摘されている。

これら認知心理学者らによる指摘は, 企(起)業家個人の感情が, 企業家活動プロセス全体に影響を及ぼし, 起業の推進力につながるだけでなく, その感情は企(起)業家を取り巻く多様なアクターでも起こりうるということを示唆している。すなわち企

(起) 業家による起業の感情は、企業家活動プロセス全体に影響を及ぼすだけでなく、その過程においてさまざまなアクターへと「伝染」を引き起こしうると考えられるのである。

#### IV-8. エフェクチュエーションと起業行為

企(起)業家にとって重要なことは、企業家活動プロセスにおける発見/創造や活用というよりは、起業という行動を実現させていくさまざまな行為にかかる意思決定と、その実現にともなう成果にあるという見解がある (McMullen and Shepherd 2006; Sarasvathy 2001 など)。感情が起業の推進力になるということは、行動の促進にもつながることを示唆している。この点に関連したものとしては、Sarasvathy (2001) のエフェクチュエーションの議論と McMullen and Shepherd (2006) の起業行為の議論があげられる。

Sarasvathy が 2001 年に *Academy of Management Review* に発表した論文以降 (Sarasvathy 2001), 彼女たちによるエフェクチュエーションをめぐる一連の諸研究は、起業機会の創造の論理だけでなく、後に説明する実践としてのアントレプレナーシップ研究の展開に強い影響を与えることになった (Dew and Sarasvathy 2002; Sarasvathy 2001; 2003; 2004 a; 2004 b; Sarasvathy et al. 2003 など)。Sarasvathy らの一連の研究によれば、これまで経済学での合理的選択は予測の論理に基づくコーゼーションであったが (Dew and Sarasvathy 2002), 人間の生活は、簡単に分析や予測をすることができず (Sarasvathy 2001), 人間の行動の領域を理解するためには合理的選択に代わる別の論理が必要であると指摘されている。そこで Sarasvathy (2001) では、コーゼーションに代わって、制御に基づくエフェクチュエーションの意思決定モデルが提唱され、このモデルの企業家活動プロセスへの適用が試みられている。このエフェクチュエーションの考え方には次のような特徴がある。第1に、企(起)業家が予測も、事前の目標も利用できず合理的選択ができない場合においても、企(起)業家は「その場から立ち上がる」ために (Dew and Sarasvathy 2002), 途中で変更や修正ができることによって予期しないような複数の結末を生み出すことになる。第2に、企(起)業家は既存の選択肢のなかから利用可能な起業機会を合理的に評価したり計算したりするのではなく、自分が行動したいと思う「選択肢そのもの」を能動的に作り出すことから (Sarasvathy 2003), 企(起)業家の行動の非目的論(テレオロジー)的側面が説明されることになる (Steyaert 2007)。そして第3に、企(起)業家は、計算をして台本に基づいて行動することよりも能動的な行動の結果から、環境に積極的に影響を与えており (Sarasvathy 2003), 関心を持つ世界の一部を構築することになる (Steyaert 2007)。

McMulle と Shepherd は、2006 年に *Academy of Management Review* に発表した論文の

なかで、アントレプレナーシップには「起業行為 (entrepreneurial action)」が必要であり、行為 (action) がシステム全体の活動や成果に影響を与えるメソレベル現象を伴うものであるとした (McMullen and Shepherd 2006; Stevenson and Jarillo 1990)。ここでは企 (起) 業家は、判断力を発揮する個人とされている。McMullen and Shepherd (2006) の議論を要約すると以下のようになる。判断とは、不確実性の高い未来において行われる代替的な行動コースの間で意思決定を行うために行使されなければならないものである。しかし、判断するだけでは十分ではなく、行動することを決断しなければならない。起業行為とは、不確実性の下で価値のある機会について判断に応じた行動のことである。起業行為が起こるかどうかは、判断にかかっているが、それは行動するかどうかの判断の不確実性の大きさによる。しかし企 (起) 業家にとっては不確実性に耐える意志が重要である。この意志は、信念と欲望の構成 (belief-desire configuration) であるが、何をすべきかの信念が知識の機能であり、なぜそれをすべきかの欲求が動機の機能である。起業行為の理解には、これら知識と動機を同時に考慮する必要があるという。

このように Sarasvathy (2001) で提唱されたエフェクチュエーションという考え方は、企業家活動プロセスにおいて、手段も目的もあらかじめ決められないなかでの行動制御という認識と不確実性の文脈に焦点を当てたプロセスの理解へとつながっていく (Steyaert 2007)。また、McMullen and Shepherd (2006) による起業行為という考え方は、不確実な状況下においても、追求する価値のある機会を特定した判断に基づいて行動するという企 (起) 業家個人の自発性による行動そのものに焦点を当てた創造的企業家活動プロセスの理解へとつながっていく。ただし、McMullen and Shepherd (2006) では、企 (起) 業家の行為がシステム全体の活動や成果に影響を与えるものとされているが、そこではその影響についてはあまり触れていないように読み取れる。

#### IV-9. 実践からのアプローチ

##### 実体から実践へ

企業家活動プロセスをめぐるでは、行為そのものに焦点が当てられるようになり、プロセスの動的側面が強調されてきたように見える。しかし、Busenitz et al. (2003) で提案されている包括的なアプローチのように、アントレプレナーシップ研究は、あくまで「企 (起) 業家」(個人ないしチーム)、「(急) 成長企業」(組織化の方法)、「機会」(環境条件) という3つの分野が交差するものとして、すなわち企 (起) 業家、(急) 成長企業、機会といった名詞で特徴づけられており、アントレプレナーシップを名詞としての実体として捉える傾向が強かった (Rindova et al. 2009)。これに対して Steyaert (2007) では、プロセスの概念化としてアントレプレネリング (entrepreneuring) が提唱

され、その概念をつうじて名詞の実体ではなく、動詞としての実践へと転換させることが提案され、これを受けて、企業家活動プロセス研究は新たな方向へと展開していくことになった。

Steyaert (2007) では、プロセスとしてのアントレプレナーシップを意味するアントレプレネリングの概念化が目指されており、組織研究などで採用されている社会理論化の実践からのアプローチから (Schatzki 2002; 2005; Spinoza et al. 1997), 企業家活動プロセスを実践的に捉えようという試みがなされている。ここでいう実践の説明は、本研究の考察範囲を超越しているため詳述しないが、Steyaert (2007) では、それは社会構成主義の関係性志向と結びつく社会的実践であり、「人々が直接実行する」身体的な行為や発言によって実行される、開かれて時間的に展開される行動のネクサス (Schatzki 2002) として説明されるという。それゆえに、実践の組織は個人の特性の集合ではなく、非個人的な現象 (Schatzki 2005) となる。さらに Steyaert (2007) では、アントレプレネリングの概念の有用性として、1つには、物体と主体が切り離された二元論的な世界を壊し、生きた世界と経験の中にプロセスを位置づけることによって、企業家活動プロセスの理解を「濃く」するのに役立つこと、またもう1つには、生活し、観察可能な経験に接続し、文化的、政治的、社会的な力の会話の織り交ぜへの接続を強調する実践の概念に集中することによって概念的な焦点を変更すること、が提案されている。Steyaert (2007) では、企業家活動プロセスを理解するうえで、Sarasvathy (2001; 2003) のエフェクチュエーションという創造的プロセス観は实用主義 (プラグマティズム) に置いたものであると評価されており、それに留まらず、より広い社会理論的概念や哲学的立場からアントレプレナーシップ研究を展開することで、プラグマティズムを超えていくことの必要性が主張されている。

アントレプレネリングの概念の理論的考察を試みた研究は多くないが、例外として Johansson (2011) がある。Johansson (2011) では、Steyaert (2007) と同様に、Schatzki が展開した実践理論との接合が試みられ (ただし引用は Schatzki (2001) と Steyaert (2007) の引用と異なる)、アントレプレナーシップを創造的で社会的・集団的な組織化のプロセスとして捉え、アントレプレネリングの概念を説明しようという試みがなされている。アントレプレナーシップを継続的な創造的な組織化として捉えることによって、活動の集合体には (個人的な) 関係性の束が含まれることになり、行為と相互作用、その源、パターンメイキングと結果という「事を成し遂げること」に焦点があてられ、さらに認知など合理主義的でなく、情熱や感情、即応性、即興性などの非合理性が存在すること (Hjorth et al. 2003), さらに日常的な実践 (Steyaert 2004) を認めることになるとしている (Steyaert 2007)。

## 解放からのアプローチ

Steyaert (2007) による実践からのアプローチは、その後、実践的アプローチからのアントレプレナーシップ研究の展開に大きな影響を及ぼしていくことになった。とくに大きな展開をみせたのが、Rindova et al. (2009) 以降による、解放の視点からのアントレプレナーシップ研究の展開である (Goss 2005 a; Goss et al. 2011; Rindova et al. 2009)。

Rindova et al. (2009) や Goss et al. (2011) では、従来のアントレプレナーシップ研究 (Aldrich 2005) が、起業をつうじた富の創出に焦点が絞られすぎていたこと、また市場機会の発掘や成長企業の成立を伴う経済活動と定義する機能主義的・実証主義的な前提にとらわれてきたことが問題視されている (Goss 2005 a; Goss et al. 2011; Hjorth and Steyaert 2004)。またその一方で、ここでは Steyaert らの諸研究 (Steyaert and Katz 2004; Steyaert and Hjorth 2006) が引用されており、アントレプレナーシップに関する批判的な言説が、その結果として生じた企 (起) 業家という狭義の概念に挑戦し、企 (起) 業家として理解できる多様な実践と結果を明らかにしてきたと評価されている (Rindova et al. 2009; Goss et al. 2011)。この点と関連して、Calás et al. (2009) では、フェミニストの視点から、アントレプレナーシップは「共通の対象」ではなく、「複雑な社会活動とプロセスの集合」であるとし、アントレプレナーシップを「社会的な変化をもたらす可能性のある経済活動」から、「多様な変化をもたらす可能性のある社会的な変化活動としてのアントレプレナーシップ」へと再定義する必要性が主張されている。

Rindova et al. (2009) の議論は、以下のように要約できる。Steyaert (2007) で提唱されたアントレプレネリングの概念は、「個人または個人のグループの行動をつうじて、新しい経済的、社会的、制度的、文化的環境をもたらす努力」と定義され、「解放」の視点から、その中核的要素は「自律性を求める」、「オーサリングする」、「宣言を行う」の3つとなる。これらはそれぞれ、別の権威による制約からの解放（「自律性を求める」こと）を、行為の主体者として関係性や取り決め、また関与のルールを定義づけする（「オーサリングする」）ことを、そして変化を生み出す行為者の意図にかんするあいまいな言説的・修辭的行為（「宣言を行う」こと）を、それぞれ意味する。こうした考え方は、1つには、Mair et al. (2012) で指摘されるように、とくにそこで経済活動と変革的な野心の両方を強調するようになる (Rindova et al. 2009; Steyaert and Hjorth 2006)、2つには、企 (起) 業家としてのエージェンシーをより徹底的に理解していくことになる、3つには、「解放」をキーワードとすることで、権力の不平等の (再) 生産と抵抗における組織化プロセスの役割に関するより広範な懸念にも触れられるようになる、4つに、個人のエージェンシーへの関心が「他者の力から解放される」という「解放」と

いう考え方を後押し、他者の力による制約もまた、企（起）業家の挑戦する力と同じように、「する」という観点から考えることができるようになる、といった諸点につながっていくことになる。

Rindova et al. (2009) で提唱された解放としてのアントレプレネリングは、その後、いくつかの実証研究へと展開していく。たとえば、Goss et al. (2011) では、実践としての力 (power as practice) の概念をとおして、ジェンダー関係の特定の次元を分析することで、企（起）業家としての能力、ひいてはその解放の可能性が、制約とエージェンシーを含む組織化されたプロセス（相互作用の儀式）の結果としてどのように理解されるかを示す試みがなされており、具体的には、英国での強制結婚の慣行を規制しようとする社会企（起）業家プロジェクトの出現を詳述した自伝的な物語『Shame』をもちいて分析がなされている。また、Mair et al. (2012) では、社会起業組織 (SEO: Social Entrepreneurial Organization) がどのようにして企（起）業家たちが対処することを目的とした社会問題への解決策を思いつき、そしてどのようにしてそれを実行するかが考察されており、①法律と権利の問題に取り組むモデル、②環境、教育、健康などの問題に取り組むモデル、③貧困、劣悪な労働条件、失業、市場へのアクセス不足などの経済問題に取り組むモデル、④市民参加に関連した問題に焦点を当てて取り組むモデル、の4つの異なる（しかし排他的ではない）社会的アントレプレネリング・モデルが導出されている。とくに Mair et al. (2012) では、社会変革を追求するさいにどのように課題、構成員、活動を組み合わせるかというモデルに焦点が当てられており、アントレプレナーシップの「組織化の方法」と「日常の展開」が強調されている (Rindova et al. 2009; Steyaert and Hjorth 2006)。

## V ディスカッション

本節では、まず、企業家活動プロセスをめぐる論文のシステマティック・レビューから明らかになった発見事実をまとめる。そして本研究の意義と課題を指摘する。

### V-1. 発見事実

本研究では、企業家活動プロセスをめぐる影響の大きい46本の論文を対象に、そのなかでもとくに他の論文に影響を与えていると考える論文をピックアップし、体系的にレビューを行った。そして、前節で示したように、レビューをつうじて、その研究の一連の展開と内容を9つのテーマ・クラスターにまとめた。それらのクラスターは次のとおりである。

- ①誰が企(起)業家で誰が企(起)業家でないのか
- ②組織としてのアントレプレナーシップ
- ③起業機会の発見・評価・活用のプロセス
- ④起業機会を発見する－認知, 知識, 学習, 意図からのアプローチ

企(起)業家個人と起業機会のネクサス／起業機会を企(起)業家個人から切り離す

- ⑤起業機会を創造する
- ⑥企業家活動プロセスの全体把握
- ⑦認知的視点による研究展開のその後
- ⑧エフェクチュエーションと起業行為
- ⑨実践からのアプローチ

実体から実践へ／解放からのアプローチ

これら9つのテーマ・クラスターは、筆者が図2の引用マッピングから独自に整理し、導出したものである。あらためて図2をみると、図中に4つの実線の囲いと、1つの点線の囲いがある。本研究のレビューをつうじて明らかになったことの1つは、企業家活動プロセスをめぐる一連の研究が、2000年に *Academy of Management Review* に NOTE として発表された Shane and Venkataraman (2000) が起点になっていることである。それゆえに、検討対象となったジャーナルを刊行年別にみて、2000年を区切りに、図2の一番上の実線の囲いとそれ以外にまず区別する。上の9つのテーマ・クラスターのうち、おもに「①誰が企(起)業家で誰が企(起)業家でないのか」と「②組織としてのアントレプレナーシップ」が一番上の実線の囲いに該当する。起業の担い手は誰なのか、その属性と分析単位をめぐる議論が展開された。

そのすぐ下の実線の囲いは、その後の研究に大きな影響を及ぼした、Shane and Venkataraman (2000) と Shane (2000) であり、「③起業機会の発見・評価・活用のプロセス」がこの囲いに該当する。これ以降、企業家活動プロセスを起業機会の発見の論理を中心として把握していこうという展開へと移ることになるが、その流れはいくつか違った様相を見せることになった。1つの流れは、認知的視点からのアプローチである。この研究は Baron (2004; 2008) などを中心として研究が展開されていった。Baron (2004; 2008) などの研究展開は、「④起業機会を発見する－認知, 知識, 学習, 意図からのアプローチ」および「⑦認知的視点による研究展開のその後」にまとめられ、これらが左下の囲いに該当する。なお2000年以前にも *Academy of Management Review* に掲載された Bird (1988), また *Journal of Business Venturing* に掲載された意図の視点を強調する Krueger et al. (2000), さらに Ajzen (1991) による行動理論は、Baron (2004; 2008) などの研究に大きな影響を及ぼしている。これらが左にある点線の囲い

に該当するが、その後の研究への展開が十分に確認できなかったこともあり、点線とし、本研究での主要な考察対象とはしていない。

Shane and Venkataraman (2000) 以降のもう1つの流れは、さまざまな分野の拡がりであり、「⑤起業機会を創造する」、「⑥企業家活動プロセスの全体把握」、「⑧エフェクチュエーションと起業行為」、「⑨実践 (practice) からのアプローチ」といったテーマ・クラスターとしてまとめられ、これらが右下の囲みに該当する。第1に、Alvarez and Barney (2007) は、起業機会の創造の論理を、発見の論理の代替可能な理論として提案し、起業機会の創造の論理の有用性を提案した。これが「⑤起業機会を創造する」である。第2に、Brockner et al. (2004), Cardon et al. (2005), また DeTienne (2010) は、企業家活動プロセスの初期段階でなく、プロセス全体の把握を提案した。これが「⑥企業家活動プロセスの全体把握」に該当する。こうした展開とも連動するかのようには、Saravathy (2001) などによるエフェクチュエーションをめぐる研究もその後の研究に大きな影響を与え、創造的企業家活動プロセス全体への把握へ転換させる研究へと展開していった。第3に、McMullen and Shepherd (2006) は、Saravathy (2001)などを踏まえて、不確実性の下で価値のある機会について判断に応じた行動としての起業行為が創造的企業家活動プロセスに影響を与え、知識 (何をすべきかの信念) と動機 (なぜそれをすべきかの欲求) の理解の必要性を主張した。これらが「⑧エフェクチュエーションと起業行為」に該当する。McMullen and Shepherd (2006) は、Baronら認知心理学の研究アプローチにみられた感情や情熱といった企 (起) 業家の精神的な側面が企業家活動プロセス全体に及ぼす影響についてとりあげた研究展開にも大きな影響を与えた。最後に第4に、Steyart (2007) を代表的研究とするアントレプレニングの研究展開であり、動詞としての実践への展開である。企 (起) 業家の身体的な行為やそれ以外の行動がどう社会と結びついて展開されるかという実践からのアプローチである。Rindova et al. (2009) でアントレプレニングが解放の観点へとさらに広がったことで、エージェントとしての企 (起) 業家の行為が社会の変革をどのようにつなげるかといった制約と社会の組織化のプロセスへと展開していった。これが、⑨実践からのアプローチに該当する。

## V-2. 貢献と課題

メリットとデメリットがコインの表裏として存在するのと同じように、本研究にも貢献と課題が裏表として存在する。第1に、本研究では、アントレプレナーシップをめぐる諸研究のなかでも、企業家活動プロセスを取り扱った影響の大きい論文のマッピングを示した点にある。具体的には、本研究では、Web of Science™ のプラットフォームから抽出した文献の引用情報を分析していくにあたって、HistCite™ の活用を試みた。こ

の方法は、いくつかの国際ジャーナルでもとりあげられた研究手法であるが (Iddy and Alon 2019; Linnenluecke 2017), 筆者の知る限り, 経営研究において企業家活動プロセスをおもなテーマとし, 研究の展開を整理したものは存在していない。このように, 本研究では, 関連する論文のシステマティック・レビューをつうじて, 諸研究がどのように展開されてきたかを明示的に示した点を本研究の貢献としてまず指摘することができる。

しかしながら, このソフトを活用したことによる課題もいくつかある。1つは, 理由は明らかではないが, Web of Science™ のテキストデータを HistCite™ に移行させるさいに, 文献のいくつかが移行できなかつたり, 移行できなかった文献を手動で入力してもそのデータが分析上反映されなかつたりなど, 分析上の課題がある。Web of Science™ のプラットフォーム上のデータベースへ HistCite™ から直接アクセスすることもできるとみられたが, これも理由は明らかではないが, 実際にはアクセスすることはできなかった。これらの課題は, Web of Science™ のバージョンと HistCite™ のそれとの整合性に起因するかもしれない。2つは, 引用マッピングへ落とし込むさいの課題である。これに関連して2つの課題がある。課題の1つは, 当初抽出された論文は43本であったが, 手動で入力した4本の論文のうち引用文献の情報が反映されていないばかりか, そもそもマッピングに落とし込みできていない論文もあった。このため, 本研究で図示したマップは, その点の課題を含んでいることに留意されたい。もう1つの課題は, 引用マッピングへの落とし込みによって抽出された論文の刊行年は, 1985年から2012年までとなっている。本研究では, 影響の大きい (引用数が比較的多い) 文献のレビューを意図していたため, 刊行年が新しい論文は含まれにくい。しかしながら, 分析対象となる428本の論文を抽出したさいには, 刊行年別にみたところ, 2013年以降にも, 2015年には32本, また2017年には50本と連続したピークがあり, 多くの論文が公開されてきている。これらのなかには,アントレプレネリアル・プロセスやアントレプレネリングを取り扱った諸研究 (たとえば, Hjorth et al. 2015; Welter et al. 2017 など) も含まれている。本研究では, 分析上の設定条件から, 2013年以降に急増する企業家活動プロセスに関連した論文をとりあげることができなかつた。これについては, 別稿にて最近の動向についてまとめる予定である。

2013年以降の引用分析は, 本研究とは別に検討していくことが課題として残されているが, 本研究のなかで企業家活動プロセスの研究展開を概観するなかで, いくつかのさらなる研究展開の方向性を推察することができる。その1つは, プロセス概念の精緻化である。本研究で示したように, 企業家活動プロセスをめぐるのは, 議論の中心ともなった起業機会の発見・評価・活用のプロセス (Shane and Venkataraman 2000; Venkataraman 1997) に加えて, 出口を含めた最終目的までのプロセスが検討されてき

た。しかしかつて Gartner が指摘したように、急成長企業の成立にはバリエーションがありえ (Gartner 1985)、直線として説明できないプロセスを描きうる (Brockner et al. 2003)。Sarasvathy (2001) におけるエフェクチュエーションや Steyeart (2007) における実践的アプローチも、そのプロセスの複雑さを示唆するものである。複雑なプロセスの描写をめぐるのは、Langley (1999) や Langley et al. (2013) など、組織研究のなかでプロセスをめぐる理論・実証研究が進展している。そうしたプロセスをめぐる諸研究と企業家活動プロセスとの接合を深めていくことが今後の研究展開の1つとなろう。この点に関連して、Dimov (2011) や McMullen and Dimov (2013) では、企業家活動プロセスをめぐる実証研究のほとんどはある時点での出来事を前提とした線形モデルとなっているとし (Dimov 2011)、企業家活動プロセスを「旅」(entrepreneurial journey) とみなし、ある一定期間にわたる「一連の出来事」(McMullen and Dimov 2013) を描写し、その複雑なプロセスを解明しようという試みがなされている。これらの諸研究は、本研究で検討対象とした論文のその後の研究展開の方向性の1つを示していると考えられる。

考えられる方向性のもう1つは、不確実性が極めて高い状況下、具体的には、危機や逆境といった場面における企業家活動プロセスとその状況の克服の解明である。危機や逆境といった場面では、多くの人々にさまざまな制約を強いることになり、日常生活を過ごすことはおろかその人々の生命すらも危ぶませる可能性もある。こうした危機や逆境といった場面において、それらの状況を乗り越えていくために企業家活動プロセスがどのように発揮されるかといった観点から、いくつかの研究が展開されている。たとえば、Shepherd and Williams (2014) や Williams and Shepherd (2016 b) では、低木地帯の火事において、企業家活動プロセスにともなう先行の知識や体験が、その火事後の遺症における行動を促進したことが明らかにされている (Shepherd and Williams 2014, Williams and Shepherd 2016 b)。また Williams et al. (2017) では、危機時には企業家(起)業家のブリコラージュ・レスポンス (Baker and Nelson 2005) が、組織の回復力を意味するレジリエンスの発揮に有用であることが指摘されている。こうした危機や逆境といった状況においては、人々はさまざまな制約に下におかれることになる。企業家活動プロセスをつうじてこの状況をいかに乗り越えていくかを解明していくことも、企業家活動プロセスをめぐる重要な研究展開の1つの方向性となろう。

第2に、本研究では、企業家活動プロセスにかんする論文のシステムティック・レビューを行うことで、9つのテーマ・クラスターを導出するとともに、それぞれのテーマ・クラスターにおいて影響の大きい論文をとりあげた。これによって、それぞれのテーマ・クラスターごとに中心的に参照すべき論文の存在を明らかにすることができた。このように本研究では、企業家活動プロセスというテーマの傘の下に、9つのテ

マ・クラスターとそれに関連した論文を明示することで、その領域のなかでの意味や捉え方を明らかにした点を本研究の貢献として指摘することができる。

しかしながら、本研究では、必ずしも論文を包括的にとりあげることができておらず、限定的であると言わざるをえない。具体的には、本研究では、文献検索のためのプラットフォームについて、検討対象となる文献を抽出するためのプラットフォームに、Web of Science™ しか活用していない。Web of Science™ は多くの領域の文献をカバーしているが、必ずしもすべての文献をカバーしているわけではない。たとえば、アントレプレナーシップ研究をはじめとする経営研究に多大な影響力をもつとされるジャーナルである *Entrepreneurship Theory and Practice* のデータベースは2003年からしか利用できない。このジャーナルの創刊が1976年であることを考えると課題は明らかである。このような課題を克服していくために、Web of Science™ 以外にも、たとえば Elsevier 社が運営する Scopus™ などの別の検索用のプラットフォームを併用する必要があるだろう。

第3に、本研究でのレビューをつうじて、企業家活動プロセスをめぐる諸研究が、影響の大きなジャーナルに掲載され、そこでたとえば組織研究や認知心理研究などといったいくつかの研究領域と積極的に交流がなされ、複合領域にまたがった理論・実証研究が展開され続けてきたことを明らかにすることができた。アントレプレナーシップ研究はそもそもある特定の研究領域に強く根差していないだけでなく、またアントレプレナーシップという用語に広く受け入れられた統一の定義はなく、研究者がその目的に応じて柔軟に定義してきたと指摘されている (Wiklund et al. 2019: 420-421)。これは課題を残す反面、研究領域上の一種の強みでもあった。本研究のレビューをつうじて、企業家活動プロセスをめぐるアントレプレナーシップ研究は、その時々に応じて、新しくもかつ重要な社会課題の解明に寄与するための理論・実証研究が展開されてきたことを明らかにすることができた。

ただし、このことは必ずしも企業家活動プロセスというトピックに限ったものでなく、新興の研究領域としてのアントレプレナーシップ研究それ自体が、他のビジネス研究と同様に、科学的な厳密性 (リガー) に加えて、その実務的な有用性 (レリバンス) を確立させていかなければならないという、研究領域全体にかかる「壮大なチャレンジ」 (Wiklund et al. 2019) が求められていたからかもしれない。他のビジネス研究と異なるのは、アントレプレナーシップ研究が、理論とパースペクティブの「万華鏡」を描くも (Shepherd 2015)、理論駆動というよりかは現象駆動的な側面が強い点にある (Wiklund et al. 2019)。それゆえに、それぞれの研究で前提としている (はずの) 社会科学のアプローチの科学的立場をめぐる議論がすべての論文のなかで明示されているわけではないのかもしれない。

しかしながら、その例外も少なからず存在しており、科学的立場をめぐっていくつか

の問題提起がなされてきている。たとえば、起業機会の発見から創造へ、すなわち客観的な視点でなく、エージェントとしての企（起）業家の主観的な視点による社会との共進化プロセスを理解するための構造化理論（Sarason et al. 2006）や、企（起）業家の行為を説明するための現実主義（realism）と社会構成主義の仮定（McMullen and Shepher 2006）、さらには実践を理解する仮定での方法論的個人主義から脱却と社会的関係への転換（Steyaert 2007）など、いくつかの研究で確認することができる。さらに Calás et al. (2009) では、「分析のレベル」という概念自体への問題提起もなされており、具体的には、アントレプレナーシップの社会的ダイナミクスを構成するミクロからマクロへのより複雑な性質や継続的なトラフィックを見落としているのではないか（2009: 564）という点に疑問が呈されている（Goss et al. 2011）。本研究では、企業家活動プロセスをめぐるアントレプレナーシップ研究における科学的立場をめぐる議論や、分析のレベルなどといった諸点について考察ができておらず課題が残っている。

## VI まとめ－小結に代えて－

本研究では、経営研究における学術領域のなかで、アントレプレナーシップの企業家活動プロセスとして表現される諸概念、具体的にはプロセスとしてのアントレプレナーシップ（entrepreneurship as process）、アントレプレネリアル・プロセス（entrepreneurial process）、そしてアントレプレネリング（entrepreneuring）のそれぞれの概念を中心に使用した、影響の大きい論文を抽出し、それを体系的にレビューすることで、研究がどのように展開されてきたかを説明することを目的としていた。

そして、Web of Science™などを活用して428本の論文を収集した。そして検討対象を絞り込むために、HistCite™の諸機能を使ってそれらの論文を引用マッピングに落とし込み、1985年から2012年までに影響力の大きいジャーナルに掲載された論文46本を抽出した。そして系統図をもとにかつ内容の類似性を考慮しながら、これらの論文を体系的にレビューすることによって、企業家活動プロセスをめぐるアントレプレナーシップ研究として、①誰が企（起）業家で誰が企（起）業家でないのか、②組織としてのアントレプレナーシップ、③起業機会の発見・評価・活用のプロセス、④起業機会を発見する－認知、知識、学習、意図からのアプローチ、⑤起業機会を創造する、⑥企業家活動プロセスの全体把握、⑦認知的視点による研究展開のその後、⑧エフェクチュエーションと起業行為、⑨実践からのアプローチという9つのテーマ・クラスターを導出した。また、それぞれのテーマ・クラスターごとに中心的に参照すべき論文の存在を明らかにした。さらに、一連のレビューをつうじて、企業家活動プロセスをめぐる諸研究が、影響の大きなジャーナルに掲載され、そこでいくつかの研究領域と積極的に交流

がなされ、複合領域にまたがった理論・実証研究が展開され続けてきたことを明らかにした。このようにして、本研究では、企業家活動プロセスをめぐるアントレプレナーシップ研究がどのように進展してきたかを明らかにするだけでなく、その進展のなかで企業家活動プロセスをめぐるアントレプレナーシップの意味やその捉え方がどのようなものであったかを明らかにした。

以上が本研究の内容と貢献であるが、本研究では以下の課題が残されている。1つは、本研究の検討範囲についてである。本研究の検討範囲から除外されてしまった2013年以降の研究動向を提示する必要がある。2013年以降に企業家活動プロセスに関連した論文が急増しており、この動向についてまとめることが必要である。2つは、本研究の検討対象についてである。検討対象の論文を Web of Science™ を活用して収集したが、これ以外のプラットフォームを活用し、検索対象を広げ、包括的に論文を収集する必要がある。最後は、検討内容についてである。本研究では研究展開の整理を行うことをおもな目的としていたが、企業家活動プロセスをめぐるアントレプレナーシップ研究における科学的立場をめぐる議論や、分析のレベルなどといった諸点についても考察を深めていく必要がある。

#### 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP18K01820 および同志社大学研究開発推進機構の「新型コロナウイルス感染症に関する研究課題 研究費」の助成を受けた成果の一部である。また2020年度在外研究の成果の一部でもある。

参考文献 (\*印は本研究の検討対象とした46本の論文であることを意味する)

- \*Ajzen, I. (1991) "The theory of planned behavior," *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50(2) : 179-211.
- Aldrich, H. E. (2005) "Entrepreneurship," Im Smelser, N. and Swedberg, R. eds., *Handbook of economic sociology*, Princeton, NJ : Princeton University Press : 451-478.
- Aldrich, H. E. and Kenworthy, A. L. (1999) "The accidental entrepreneur : Campbellian antinomies and organizational foundings," In Baum, J. A. C. and McKelvey, B. eds., *Variations in Organization Science : In Honor of Donald T. Campbell*, Thousand Oaks, CA : SAGE Publications : 19-33.
- Alvarez, S. A. and Barney, J. (2005) "How entrepreneurs organize firms under conditions of uncertainty," *Journal of Management*, 31(5) : 776-793.
- \*Alvarez, S. A. and Barney, J. (2007) "Discovery and creation : Alternative theories of entrepreneurial action," *Strategic Entrepreneurship Journal*, 1(1-2) : 11-26.
- Alvarez, S. A. and Busenitz, L. W. (2001) "The entrepreneurship of resource-based theory," *Journal of Management*, 27 : 755-775.
- \*Ardichvili, A., Cardozo, R., and Ray, S. (2003) "A theory of entrepreneurial opportunity identification and development," *Journal of Business Venturing*, 18(1) : 105-123.
- \*Austin, J., Stevenson, H. and Wei-Skillern, J. (2006) "Social and commercial entrepreneurship : Same, different, or both?," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 30 : 1-22.
- \*Baker T. and Nelson R. (2005) "Creating something from nothing : resource construction through entrepre-

- neurial bricolage," *Administrative Science Quarterly*, 50 : 329-366.
- Baron, R. A. (1998) "Cognitive mechanisms in entrepreneurship : Why and when entrepreneurs think differently than other people," *Journal of Business Venturing*, 13(4) : 275-294.
- \*Baron, R. A. (2004) "The cognitive perspective : A valuable tool for answering entrepreneurship's basic "why" questions," *Journal of Business Venturing*, 19(2) : 169-172.
- \*Baron, R. A. (2008) "The role of affect in the entrepreneurial process," *Academy of Management Review*, 33(2) : 328-340.
- Baron, J. N. and Hannan, M. T. (2002) "Organizational blueprints for success in high-tech start-ups : Lessons from the Stanford project on emerging companies," *California Management Review*, 44(3) : 8-36.
- \*Baron, R. A. and Tang, J. (2011) "The role of entrepreneurs in firm-level innovation : Joint effects of positive affect, creativity, and environmental dynamics," *Journal of Business Venturing*, 26(1) : 49-60.
- \*Baron, R. A. and Ward, T. B. (2004) "Expanding entrepreneurial cognition's toolbox : Potential contributions from the field of cognitive science," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 28(6) : 553-573.
- Bhave, M. P. (1994) "A process model of entrepreneurial venture creation," *Journal of Business Venturing*, 9(3) : 223-242.
- \*Bird, B. (1988) "Implementing entrepreneurial ideas : The case for intention," *Academy of Management Review*, 13(3) : 442-453.
- \*Brixy, U., Sternberg, R., and Stüber, H. (2012) "The selectiveness of the entrepreneurial process," *Journal of Small Business Management*, 50(1) : 105-131.
- \*Brockner, J., Higgins, E. T., and Low, M. B. (2004) "Regulatory focus theory and the entrepreneurial process," *Journal of Business Venturing*, 19(2) : 203-220.
- \*Bruyat, C. and Julien, P.-A. (2001) "Defining the field of Research in entrepreneurship," *Journal of Business Venturing*, 16 : 165-180.
- Busenitz, L. W. and Barney, J. (1997) "Differences between entrepreneurs and managers in organizations : Biases and heuristics in strategic decision-making," *Journal of Business Venturing*, 12(1) : 9-30.
- Busenitz, L. W., West, G. P., Shepherd, D. A., Nelson, T., Chandler, G., and Zacharakis, A. (2003) "Entrepreneurship research in emergence : Past trends and future opportunities," *Journal of Management*, 29(3) : 285-308.
- Calás, M., Smircich, L., & Bourne, K. (2009) "Extending the boundaries : Reframing 'entrepreneurship as social change' through feminist perspectives," *Academy of Management Review*, 34 : 552-569.
- \*Cardon, M. S. (2008) "Is passion contagious? The transference of entrepreneurial passion to employees," *Human Resource Management Review*, 18(2) : 77-86.
- \*Cardon, M. S., Foo, M.-D., Shepherd, D. A., and Wiklund, J. (2012) "Exploring the heart : Entrepreneurial emotion is a hot topic," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 36(1) : 1-10.
- \*Cardon, M. S., Wincent, J., Singh, J., and Drnovsek, M. (2009) "The nature and experience of entrepreneurial passion," *Academy of Management Review*, 34(3) : 511-532.
- Cardon, M. S., Zietsma, C., Saparito, P., Matherne, B. P., and Davis, C. (2005) "A tale of passion : New insights into entrepreneurship from a parenthood metaphor," *Journal of Business Venturing*, 20(1) : 23-45.
- \*Carter, N. M., Gartner, W. B., and Reynolds, P. (1996) "Exploring start-up event sequences," *Journal of Business Venturing*, 11(3) : 151-166.
- Casson, M. (1982) *The entrepreneur : An economic theory*, Totowa, NJ : Barnes & Noble Books.
- \*Chell, E. (2007) "Social enterprise and entrepreneurship," *International Small Business Journal*, 25(1) : 5-26.
- \*Choi, Y. R. and Shepherd, D. A. (2004) "Entrepreneurs' decisions to exploit opportunities," *Journal of Management*, 30(3) : 377-395.
- \*Corbett, A. (2005) "Entrepreneurial learning within the process of opportunity identification and exploitation," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 29(4) : 473-491.

- Covin, J. G. and Slevin, D. P. (1989) "Strategic management of small firms in hostile and benign environments," *Strategic Management Journal*, 10 : 75-87.
- Covin, J. G. and Slevin, D. P. (1991) "A conceptual model of entrepreneurship as firm behavior," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 16(1) : 7-24.
- \*Davidsson, P. and Honig, B. (2003) "The role of social and human capital among nascent entrepreneurs," *Journal of Business Venturing*, 18(3) : 301-331.
- \*DeTienne, D. R. (2010) "Entrepreneurial exit as a critical component of the entrepreneurial process : Theoretical development," *Journal of Business Venturing*, 25(2) : 203-215.
- Dew, N. and Sarasvathy, S. D. (2002) "What effectuation is not : further development of an alternative to rational choice," Paper presented at the Annual Meeting of the Academy of Management, Denver, CO, 12 August.
- Dimov, D. (2011) "Grappling with the unbearable elusiveness of entrepreneurial opportunities," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 35(1) : 57-81.
- \*Dubini, P. and Aldrich, H. (1991) "Personal and extended networks are central to the entrepreneurial process," *Journal of Business Venturing* 6(5) : 305-313.
- \*Eckhardt, J. T. and Shane, S. A. (2003) "Opportunities and entrepreneurship," *Journal of Management*, 29(3) : 333-349.
- Frank, H. and Landström, H. (2016) "What makes entrepreneurship research interesting? Reflections on strategies to overcome the rigour-relevance gap," *Entrepreneurship & Regional Development*, 28(1-2) : 51-75.
- Gaglio, C. M. and Katz, J. (2001) "The psychological basis of opportunity identification : Entrepreneurial alertness," *Journal of Small Business Economics*, 12(2) : 95-111.
- Garfield, E. (1979) "Is citation analysis a legitimate evaluation tool?," *Scientometrics*, 1(4) : 359-375.
- \*Gartner, W. B. (1985) "A conceptual framework for describing the phenomenon of new venture creation," *Academy of Management Review*, 10(4) : 696-706.
- Gartner, W. B. (1988) "Who is an entrepreneur is the wrong question," *American Journal of Small Business*, 12(4) : 11-32.
- Goss, D. (2005 a) "Entrepreneurship and 'the social' : Towards a deference-emotion theory," *Human Relations*, 58(5) : 617-636.
- Goss, D. (2005 b) "Schumpeter's legacy : Interaction and emotions in the sociology of entrepreneurship," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 29(2) : 205-218.
- \*Goss, D., Jones, R., Betta, M., and Latham, J. (2011) "Power as practice : A micro-sociological analysis of the dynamics of emancipatory entrepreneurship," *Organization Studies*, 32(2) : 211-229.
- Gove, P. B. (1986) Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged. Merriam-Webster, Springfield, Mass.
- Greve, W. (2001) "Traps and gaps in action explanation : Theoretical problems of a psychology of human action," *Psychological Review*, 108(2) : 435-451.
- Gundolf, K. and Filser, M. (2013) "Management research and religion : A citation analysis," *Journal of Business Ethics*, 112 : 177-185.
- Hayek, F. A. (1945) "The use of knowledge in society," *American Economic Review*, 35 : 519-530.
- \*Hoang, H. and Antoncic, B. (2003) "Network-based research in entrepreneurship," *Journal of Business Venturing*, 18(2) : 165-187.
- Hjorth, D. and Steyaert, C. (2004) *Narrative and discursive approaches in entrepreneurship*, Cheltenham : Edward Elgar.
- Hjorth, D., Holt, R., and Steyaert, C. (2015) "Entrepreneurship process studies," *International Small Business Journal*, 33(6) : 599-611.
- Hjorth, D., Johannisson, B., and Steyaert, C. (2003) "Entrepreneurship as discourse and life style," In

- Czarniawska, B. and Sevón, G. eds., *Northern light : Organization theory in Scandinavia*, Malmö : Liber ; Oslo : Abstrakt : 91-110.
- Iddy, J. J. and Alon, I. (2019) "Knowledge management in franchising : A research agenda," *Journal of Knowledge Management*, 23 (4) : 763-785.
- \*Johannisson, B. (2011) "Towards a practice theory of entrepreneuring," *Small Business Economics*, 36 : 135-150.
- \*Katz, J. and Gartner, W. B. (1988) "Properties of emerging organizations," *Academy of Management Review*, 13 (3) : 429-441.
- Kirzner, I. (1979) *Perception, Opportunity, and Profit*, Chicago, University of Chicago Press.
- \*Kirzner, I. M. (1997) "Entrepreneurial discovery and the competitive market process : An Austrian approach," *Journal of Economic Literature*, 35 : 60-85.
- Korunka, C., Frank, H., Lueger, M., and Mugler, J. (2003) "The entrepreneurial personality in the context of resources, environment, and the startup process : A configurational approach," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 28 (1) : 23-42.
- Kraus, S., Filser, M., O'Dwyer, M., and Shaw, E. (2014) "Social Entrepreneurship : An exploratory citation analysis," *Review of Managerial Science*, 8 : 275-292.
- Krueger, N. F., Jr. (2000) "The cognitive infrastructure of opportunity recognition," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 24 (3) : 5-23.
- \*Krueger, N. F., Reilly, M. D., and Carsrud, A. L. (2000) "Competing models of entrepreneurial intentions," *Journal of Business Venturing*, 15 (5-6) : 411-432.
- Langley, A. (1999) "Strategies for theorizing from data," *Academy of Management Review*, 24 (4) : 691-710.
- Langley, A., Smallman, C., Tsoukas, H., and Van de Ven, A. H. (2013) "Process studies of change in organization and management : Unveiling temporality, activity, and flow," *Academy of Management Review*, 38 (1) : 1-13.
- \*Liñán, F. and Chen, Y.-M. (2009) "Development and cross-cultural application of a specific instrument to measure entrepreneurial intentions," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 33 (3) : 593-617.
- Liñán, F. and Fayolle, A. (2015) "A systematic literature review on entrepreneurial intentions : citation, thematic analyses, and research agenda," *International Entrepreneurship and Management Journal*, 11 (4) : 907-933.
- Linnenluecke, M. K. (2017) "Resilience in business and management research : A Review of influential publications and a research agenda," *International Journal of Management Review*, 19 : 4-19.
- Low M. B. and MacMillan, I. C. (1988) "Entrepreneurship : Past research and future challenges," *Journal of Management*, 14 (2) : 139-161.
- \*Lumpkin, G. T. and Dess, G. G. (1996) "Clarifying the entrepreneurial orientation construct and linking it to performance," *Academy of Management Review*, 21 (1) : 135-172.
- MacMillan, I. C. (1982) "Seizing competitive initiative," *Journal of Business Strategy*, 2 (4) : 43-57.
- \*Mair, J., Battilana, J., and Cardenas J. (2012) "Organizing for society : A typology of social entrepreneuring models," *Journal of Business Ethics*, 111, 353-373.
- McMullen, J. S. and Dimov, D. (2013) "Time and the Entrepreneurial Journey : The Problems and Promise of Studying Entrepreneurship as a Process," *Journal of Management Studies*, 50 (8) : 1481-1512.
- McMullen, J. S. and Shepherd, D. A. (2003) "Extending the theory of the entrepreneur using a signal detection framework," in Katz, J. and Shepherd, D. A. eds., *Advances in entrepreneurship, firm emergence, and growth*, Greenwich, CT : JAI Press : 203-248.
- \*McMullen, J. S. and Shepherd, D. A. (2006) "Entrepreneurial action and the role of uncertainty in the theory of the entrepreneur," *Academy of Management Review*, 31 (1), 132-152.
- McMullen, J. S., Ingram, K. M., and Adams, J. (2020) "What makes an entrepreneurship study entrepreneurial?"

- Toward a unified theory of entrepreneurial agency," *Entrepreneurship Theory and Practice*, in press.
- Miller, D. (1983) "The correlates of entrepreneurship in three types of firms," *Management Science*, 29(7) : 770-791.
- Mitchell, R. K., Busenitz, L., Lant, T., McDougall, P. P., Morse, E. A., and Smith, J. B. (2002) "Toward a theory of entrepreneurial cognition : Rethinking the people side of entrepreneurship research," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 27(2) : 93-104.
- Mitchell, R. K., Smith, B., Seawright, K. W., and Morse, E. A. (2000) "Cross-cultural cognitions and the venture creation process," *Academy of Management Journal*, 43(5) : 974-993.
- Pittaway, L., and Cope, J. (2007) "Entrepreneurship education : A systematic review of the evidence," *International Small Business Journal*, 25(5) : 479-510.
- Podsakoff, P. M., MacKenzie, S. B., Bachrach, D. G., and Podsakoff, N. P. (2005) "The influence of management journals in the 1980s and 1990s," *Strategic Management Journal*, 26(5) : 473-488.
- \*Podsakoff, P. M., MacKenzie, S. B., Lee, J. Y., and Podsakoff, N. P. (2003) "Common method biases in behavioral research : a critical review of the literature and recommended remedies," *Journal of Applied Psychology*, 88(5) : 879-903.
- Reynolds, P. D. and White, S. B. (1997) *The entrepreneurial process : Economic growth, men, women, and minorities*, Westport, CT : Quorum Books.
- \*Rindova, V., Barry, D., and Ketchen, J. D. (2009) "Entrepreneurship as emancipation," *Academy of Management Review*, 34(3), 477-491.
- \*Sarason, Y., Dean, T., and Dillard, J. F. (2006) "Entrepreneurship as the nexus of individual and opportunity : A structuration view," *Journal of Business Venturing*, 21(3) : 286-305.
- \*Sarasvathy, S. D. (2001) "Causation and effectuation : toward a theoretical shift from economic inevitability to entrepreneurial contingency," *Academy of Management Review*, 26(2) : 243-263.
- Sarasvathy, S. D. (2003) "Entrepreneurship as a science of the artificial," *Journal of Economic Psychology*, 24(2) : 203-220.
- Sarasvathy, S. D., Dew, N., Velamuri, S. R. and Venkataraman, S. (2003) "Three views of entrepreneurial opportunity," In Acs, Z. J. and Audretsch, D. B., eds., *Handbook of Entrepreneurship Research*, New York : Springer Science : 141-160.
- Schatzki, T. R. (2001) "Introduction : Practice theory," In Schatzki, T. R., Cetina, K. K., and von Savigny, E. eds, *The practice turn in contemporary theory*, London : Routledge : 1-14.
- Schatzki, T. R. (2002) *The Site of the Social : A Philosophical Account of the Constitution of Social Life and Change*, University Park, PA : The Pennsylvania State University Press.
- Schatzki, T. R. (2005) "The sites of organizations," *Organization Studies*, 26(3) : 465-484.
- Schumpeter, J. A. (1934) *The theory of economic development*. New Brunswick, NJ : Transaction.
- \*Shah, S. K. and Tripsas, M. (2007) "The accidental entrepreneur : the emergent and collective process of user entrepreneurship," *Strategic Entrepreneurship Journal*, 1(1-2) : 123-140.
- \*Shane, S. (2000) "Prior Knowledge and the Discovery of Entrepreneurial Opportunities," *Organization Science*, 11(4) : 448-469.
- Shane, S. (2003). *A general theory of entrepreneurship : The individual-opportunity nexus approach to entrepreneurship*, Cheltenham, UK : Edward Elgar.
- \*Shane, S. and Venkataraman, S. (2000) "The Promise of Entrepreneurship as a Field of Research," *Academy of Management Review*, 25(1) : 217-226.
- Shepherd, D. A. (2015) "Party On! A call for entrepreneurship research that is more interactive, activity based, cognitively hot, compassionate, and prosocial," *Journal of Business Venturing*, 30(4) : 489-507.
- Shepherd, D. A. and Williams, T. A. (2014) "Local venturing as compassion organizing in the aftermath of a natural disaster : The role of localness and community in reducing suffering," *Journal of Management*

- Studies*, 51(6) : 952-994.
- Small, H. G. (1978) "Co-citation context analysis and the structure of paradigms," *Journal of Documentation*, 36(3) : 183-196.
- \*Smith, B. R., Matthews, C. H., and Schenkel, M. T. (2009) "Differences in entrepreneurial opportunities : The role of tacitness and codification in opportunity identification," *Journal of Small Business Management*, 47(1) : 38-57.
- Stevenson, H. H. and Jarillo, J. C. (1990) "A paradigm of entrepreneurship : Entrepreneurial management," *Strategic Management Journal*, 11 : 17-27.
- Steyaert, C. (2004) "The prosaics of entrepreneurship," In Hjorth, D. and Steyaert, C. eds., *Narrative and discursive approaches in entrepreneurship*, Cheltenham : Edward Elgar : 8-21.
- \*Steyaert, C. (2007) "Entrepreneurship as a conceptual attractor : A review of process theories in twenty years of entrepreneurship studies," *Entrepreneurship & Regional Development*, 19(6) : 453-477.
- Steyaert, C., and Hjorth, D. (2006) *Entrepreneurship as social change*, Cheltenham : Edward Elgar.
- Steyaert, C. and Katz, J. (2004) "Reclaiming the space of entrepreneurship in society : Geographical, discursive and social dimensions," *Entrepreneurship & Regional Development*, 16 : 179-196.
- Tranfield, D., Denyer, D., and Smart, P. (2003) "Towards a methodology for developing evidence : Informed management knowledge by means of systematic review," *British Journal of Management*, 14(3) : 207-222.
- \*Venkataraman, S. (1997) "The Distinctive Domain of Entrepreneurship Research," In Katz, J. and Brockhaus, R. eds., *Advances in entrepreneurship, firm emergence and growth*, Greenwich, CT : JAI Press : 119-138.
- Venkataraman S. (2003) "Foreword," In Shane, S. ed., *A general theory of entrepreneurship : The individual-opportunity nexus*, Northampton, MA, Edward Elgar : xi-xii.
- Ward, T. B. (2004) "Cognition, creativity, and entrepreneurship," *Journal of Business Venturing*, 19(2) : 173-188.
- Webster, F. A. (1977) "Entrepreneurs and ventures : An attempt at classification and clarification," *Academy of Management Review*, 2(1) : 54-61.
- \*Welter, F. (2011) "Contextualizing entrepreneurship : Conceptual challenges and ways forward," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 35(1) : 165-184.
- Welter, F., Baker, T., Audretsch, D. B., and Gartner, W. B. (2017) "Everyday entrepreneurship : A call for entrepreneurship research to embrace entrepreneurial diversity," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 41(3) : 311-321.
- Wiklund, J., Wright, M., and Zahra, S. A. (2019) "Conquering relevance : Entrepreneurship research's grand challenge," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 43(3) : 49-436.
- Williams, T. A. and Shepherd, D. A. (2016 a) "Building resilience or providing sustenance : Different paths of emergent ventures in the aftermath of the Haiti Earthquake," *Academy of Management Journal*, 59(6) : 2069-2102.
- Williams, T. A. and Shepherd, D. A. (2016) "Victim entrepreneurs doing well by doing good : Venture creation and well-being in the aftermath of a resource shock," *Journal of Business Venturing*, 31(4) : 365-387.
- Williams, T. A., Gruber, D. A., Sutcliffe, K. M., Shepherd, D. A., and Zhao, E. Y. (2017) "Organizational response to adversity : Fusing crisis management and resilience research streams," *Academy of Management Annals*, 11(2) : 733-769.
- Xi, J. M., Kraus, S., Filser, M., and Kellermanns, F. W. (2015) "Mapping the field of family business research : past trends and future directions," *International Entrepreneurship and Management Journal*, 11(1) : 1-20.
- 関連文献 (本研究で参照した文献のなかで引用され、かつとくに本研究に関連のある文献)
- Ajzen, I. (1987) "Attitudes, traits, and actions : Dispositional prediction of behavior in social psychology," *Advances in Experimental Social Psychology*, 20 : 1-63.

- Autio, E., Keeley, R. H., Klofsten, M., Parker, G. G. C., and Hay, M. (2001) "Entrepreneurial intent among students in Scandinavia and in the USA," *Enterprise and Innovation Management Studies*, 2(2) : 145-160.
- Baas, M., De Dreu, C. K. W., and Nijstad, B. A. (2008) "A meta-analysis of 25 years of mood-creativity research : hedonic tone, activation, or regulatory focus?," *Psychological Bulletin*, 134 : 779-806.
- Baron, R. A. (2002) "OB and entrepreneurship : The reciprocal benefits of closer conceptual links," In Staw, B. M. and Kramer, R. eds., *Research in organizational behavior*, Greenwich, CT : JAI Press : 225-269.
- Baron, R. A. (2006 a) "Opportunity recognition as pattern recognition : How entrepreneurs "connect the dots" to identify new business opportunities," *Academy of Management Perspectives*, 20(1) : 104-119.
- Baron, R. A. (2006 b) "Entrepreneurship : A process perspective," In Baum, R., Frese, M. and Baron, R. A. eds., *The psychology of entrepreneurship (Frontiers of Industrial/Organizational Psychology Series)*, Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates : 19-40.
- Baron, R. A. and Shane, S. (2005) *Entrepreneurship : A Process Perspective*. Mason, OH : South-Western.
- Begley, T. M. and Boyd, D. P. (1987) "Psychological characteristics associated with performance in entrepreneurial firms and smaller businesses," *Journal of Business Venturing*, 2(1) : 79-93.
- Berger P. L. and Luckmann, T. (1967) *The social construction of reality : A treatise in the sociology of knowledge*, Garden City, NY : Anchor Books Doubleday.
- Bird, B. (1989) *Entrepreneurial behavior*, Glenview, IL : Scott Foresman.
- Brown, T. E., Davidsson, P., and Wiklund, J. (2001) "An operationalization of Stevenson's conceptualization of entrepreneurship as opportunity-based firm behavior," *Strategic Management Journal*, 22 : 953-968.
- Busenitz, L. W. (1996) "Research on entrepreneurial alertness," *Journal of Small Business Management*, 34 (4) : 35-44.
- Busenitz, L. W. and Arthurs, A. (2006) "Entrepreneurial cognition and dynamic capabilities in the development of new ventures," In Baum, R., Frese, M., and Baron, R. A., eds., *The psychology of entrepreneurship*, Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates : 131-150.
- Busenitz, L. W., Gómez, C., and Spencer, J. W. (2000) "Country institutional profiles : Unlocking entrepreneurial phenomena," *Academy of Management Journal*, 43(5) : 994-1003.
- Cannella, A. A., Jr. and Paetzold, R. L. (1994) "Pfeffer's barriers to the advancement of organizational science : A rejoinder," *Academy of Management Review*, 19(2) : 331-341.
- Cooper, A. C. and Dunkelberg, W. C. (1986) "Entrepreneurship and paths to business ownership," *Strategic Management Journal*, 7(1) : 53-68.
- Corbett, A. (2007) "Learning Asymmetries and the Discovery of Entrepreneurial Opportunities," *Journal of Business Venturing*, 22(1) : 97-118.
- Damasio, A. R. (1994) *Descartes' error : Emotion, reason and the human brain*, New York : Grossett/Putnam.
- Dimov, D. (2007) "From opportunity insight to opportunity intention : The importance of person-situation learning match," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 31(4) : 561-583.
- Douglas, E. and Shepherd, D. A. (2000) "Entrepreneurship as a utility maximizing response," *Journal of Business Venturing*, 15 : 393-410.
- Foo, M. (2011) "Emotions and entrepreneurial opportunity evaluation," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 35(2) : 375-393.
- Foo, M., Uy, M., & Baron, R. A. (2009). How do feelings influence effort? An empirical study of entrepreneurs' affect and venture effort. *Journal of Applied Psychology*, 94(4) : 1086-1094.
- Forlani, D. and Mullins, J. W. (2000) "Perceived risks and choices in entrepreneurs' new venture decisions," *Journal of Business Venturing*, 15(4) : 305-322.
- Fuller, T., Warren, L. and Welter, F. (2006) "The contribution of emergence to entrepreneurship theory : A review," Paper presented at the 20th RENT Conference, Brussels, November.
- Gartner, W. B., Shaver, K. G., Gatewood, E. J., and Katz, J. (1994) "Finding the entrepreneur in entrepreneur-

- ship," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 18(3) : 5-10.
- Gartner, W. B., Starr, J. A., and Bhat, S. (1999) "Predicting new venture survival : An analysis of "anatomy of a startup" cases from Inc. Magazine," *Journal of Business Venturing*, 14(2) : 215-232.
- George, G. and Zahra, S. A. (2002) "Culture and its consequence for entrepreneurship," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 26(4) : 5-7.
- Godwin, L. N., Stevens, C. E., and Brenner, N. L. (2006) "Forced to play by the rules?: Theorizing how mixed-sex founding teams benefit women entrepreneurs in male-dominated contexts," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 30(5) : 623-642.
- Harrigan, K. R. (1983) "Research methodologies for contingency approaches to business strategy," *Academy of Management Review*, 8(3) : 398-405.
- Hayward M., Shepherd D. A., and Griffin, D. (2006) "A hubris theory of entrepreneurship," *Management Science*, 52(1) : 160-172.
- Herron, L. and Sapienza, H. J. (1992) "The entrepreneur and the initiation of new venture launch activities," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 17(1) : 49-55.
- Hitt, M. A., Beamish, P. W., Jackson, S. E., and Mathieu, J. E. (2007) "Building theoretical and empirical bridges across level : Multilevel research in management," *Academy of Management Journal*. 50(6) : 1385-1399.
- Hmieleski, K. M. and Baron, R. A. (2009) "Entrepreneurs' optimism and new venture performance : A social cognitive perspective," *Academy of Management Journal*, 52(3) : 473-488.
- Kaish, S. and Gilad, B. (1991) "Characteristics of opportunity searches of entrepreneurs versus executives : Sources, interests, and general alertness," *Journal of Business Venturing*, 6 : 45-61.
- Katz, J. (1992) "Modeling entrepreneurial career progressions : Concepts and considerations," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 19(2) : 23-39.
- Kimberly, J. R. (1981) "Managerial innovation," In Nystrom, P. C. and Starbuck, W. H. eds., *Handbook of organizational design*, Vol.1, New York : Oxford University Press : 84-104.
- Kirzner, I. M. (1982) "Uncertainty, discovery, and human action : A study of the entrepreneurial profile in the Misesian system," In Kirzner, I. M. ed., *Method, process, and Austrian economics*, Washington, DC : Heath : 139-159.
- Kirzner, I. M. (1999) "Creativity and/or alertness : A reconsideration of the Schumpeterian entrepreneur," *Review of Austrian Economics*, 11 : 5-17.
- Knight, F. H. (1921) *Risk, uncertainty and profit*, Washington, DC : Beard Books.
- Kolb, D. A. (1984) *Experiential learning : Experience as the source of learning and development*, Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall.
- Kolveid, L. and Isaksen, E. (2006) "New business start-up and subsequent entry into self-employment," *Journal of Business Venturing*, 21(6) : 866-885.
- Krueger, N. F., Jr. (1993) "The impact of prior entrepreneurial exposure on perception of new venture feasibility and desirability," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 18(1) : 5-21.
- Krueger, N. F., Jr. (2003) "The cognitive psychology of entrepreneurship," In Acs, Z. A. and Audretsch, D. B. eds., *Handbook of entrepreneurial research*, London : Kluwer Law International : 105-140.
- Lee, S. H. and Wong, P. K. (2004) "An exploratory study of technopreneurial intentions : A career anchor perspective," *Journal of Business Venturing*, 19(1) : 7-28.
- Liñán, F. (2004) "Intention-based models of entrepreneurship education," *Piccola Impresa/Small Business*, 2004(3) : 11-35.
- Locke, E. A. and Baum, J. R. (2007) "Entrepreneurial motivation," In Baum, J. R., Frese, M., and Baron, R. A. eds., *The psychology of entrepreneurship*, Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates Publishers : 67-92.

- MacMillan, I. C. (1986) "To really learn about entrepreneurship, let's study habitual entrepreneurs," *Journal of Business Venturing*, 1 : 241-243.
- MacMillan, I. C. and Katz, J. (1992) "Idiosyncratic milieus of entrepreneurship research : The need for comprehensive theories," *Journal of Business Venturing*, 7 : 1-8.
- Markman, G. D., Balkin, D. B., and Baron R. A. (2001) "Inventors' cognitive mechanisms as predictors of new venture formation," Paper presented at the meetings of the Academy of Management, Washington, DC. August.
- Matlin, M. W., 2002. *Cognition*, 5th ed. Harcourt College, Fort Worth, TX.
- Marlow, S. and Patton, D. (2005) "All credit to men : Entrepreneurship, finance and gender," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 29(6) : 717-735.
- Matlin, M. W. (2002) *Cognition*, 5th ed., Fort Worth, TX : Harcourt College.
- March, J. G. (1982) "The technology of foolishness," In March, J. G. and Olsen, J. P. eds., *Ambiguity and choice in organizations*, Bergen, Norway : Universitetsforlaget : 69-81.
- Mason, C. M. and Harrison, R. T. (2006) "After the exit : Acquisitions, entrepreneurial recycling and regional economic development," *Regional Studies*, 40(1) : 55-73.
- Mayer, D., Gartner, W. B., and Venkataraman, S. (2000) "The research domain of entrepreneurship," *Entrepreneurship Division Newsletter*, 15, 6.
- McFall, R. M. and Treat, T. A. (1999) "Quantifying the information value of clinical assessments with signal detection theory," *Annual Review of Psychology*, 50 : 215-241.
- McKelvey, B. (1999) "Toward a Campbellian realist organization science," In Baum, J. and McKelvey, B. eds., *Variations in organization science : In honor of Donald T. Campbell*, Thousand Oaks, CA : SAGE Publications : 383-411.
- Meyskens, M., Robb-Post, C., Stamp, J. A., Carsrud, A. L., and Reynolds, P. D. (2010) "Social ventures from a resource-based perspective : An exploratory study assessing global Ashoka fellows," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 34(4) : 661-680.
- Miller, K. D. (2007) "Risk and rationality in entrepreneurial processes," *Strategic Entrepreneurship Journal*, 1 (1-2) : 57-74.
- Mintzberg, H. (1994) *The rise and fall of strategic planning*. New York : Free Press.
- Mitchell, R. K., Busenitz, L., Lant, T., McDougall, P. P., Morse, E. A., and Smith, J. B. (2004) "The distinctive and inclusive domain of entrepreneurial cognition research," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 28(6) : 505-518.
- Mueller, S. L. and Thomas, A. S. (2001) "Culture and entrepreneurial potential : A nine country study of locus of control and innovativeness," *Journal of Business Venturing*, 16(1) : 51-75.
- Mueller, S. L., Thomas, A. S., and Jaeger, A. M. (2002) "National entrepreneurial potential : The role of culture, economic development and political history," In Hitt, M. A. and Cheng, J. L. C. eds., *Managing transnational firms : Resources, market entry and strategic alliances*, Amsterdam : JAI Press : 221-257.
- Murnieks, C., and Mosakowski, E. (2006) "Entrepreneurial passion : An identity theory perspective," Paper presented at the Academy of Management Conference, Atlanta, GA.
- Parsons, T. and Shils, E. (1962) *Toward a general theory of action*, Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Sarasvathy, S. D. (2004 a) "Making it happen : beyond theories of the firm to theories of firm design," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 28(6) : 519-531.
- Sarasvathy, S. D. (2004 b) "The questions we ask and the questions we care about : Reformulating some problems in entrepreneurship research," *Journal of Business Venturing*, 19(5) : 707-717.
- Schindehutte, M. and Morris, M. H. (2009) "Advancing strategic entrepreneurship research : The role of complexity science in shifting the paradigm," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 33(1) : 241-276.
- Schollhammer, H. (1982) "Internal corporate entrepreneurship," In Kent, C., Sexton, D., and Vesper, K. H.

- eds., *Encyclopedia of Entrepreneurship*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall : 209-223.
- Seelos, C. (2014) "Theorizing and strategizing with models : Generative models of social enterprises," *International Journal of Entrepreneurial Venturing*, 6(1) : 6-21.
- Seelos, C. and Mair, J. (2005) "Social entrepreneurship : Creating new business models to serve the poor," *Business Horizons*, 48(3) : 241-246.
- Seo, M., Barrett, L. F., and Bartunek, J. M. (2004) "The role of affective experience in work motivation," *Academy of Management Review*, 29(3) : 423-439.
- Shane, S., Locke, E. A., and Collins, C. J., (2003) "Entrepreneurial motivation," *Human Resource Management Review*, 13(2) : 257-279.
- Shapiro, A. (1982) "Social Dimensions of Entrepreneurship," In Kent, C., Sexton, D., and Vesper, K. H. eds., *Encyclopedia of Entrepreneurship*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall : 72-90.
- Shaver, K. G. and Scott, L. R. (1991) "Person, process, and choice : The psychology of new venture creation," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 16(2) : 23-42.
- Shepherd, D. A. (2003) "Learning from business failure : Propositions of grief recovery for the self-employed," *Academy of Management Review*, 28(2) : 318-329.
- Shepherd, D. A. and DeTienne, D. R. (2001) "Discovery of opportunities : Anomalies, accumulation and alertness," In Bygrave, W. D., Autio, E., Brush, C. G., Davidsson, P., Green, P. G., Reynold, P. D., and Sapienza, H. J. eds., *Frontiers of entrepreneurship research : Proceedings of the twenty-first annual entrepreneurship research conference*. Wellesley, MA : Boston College.
- Shepherd, D. A., Patzelt, H., and Wolfe, M. (2011) "Moving forward from project failure : Negative emotions, affective commitment, and learning from the experience," *Academy of Management Journal*, 54(6) : 361-380.
- Shepherd, D. A., Wiklund, J., and Haynie, J. (2009) "Moving forward : Balancing the financial and emotional costs of business failure," *Journal of Business Venturing*, 24(2) : 134-148.
- Simon, M., Houghton, S. M., and Aquino, K. (2000) "Cognitive biases, risk perception, and venture formation : How individual decide to start companies," *Journal of Business Venturing*, 15(2) : 113-134.
- Smilor, R. W. (1997) "Entrepreneurship : Reflections on a subversive activity," *Journal of Business Venturing*, 12(5) : 341-346.
- Sternberg, R. J. ed. (1999) *The Nature of Cognition*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Sternberg, R. J. (2004) "Successful intelligence as a basis for entrepreneurship," *Journal of Business Venturing*, 19(2) : 189-201.
- Stevenson, H. H. and Gumpert, D. (1985) "The heart of entrepreneurship," *Harvard Business Review*, 63(2) : 85-94.
- Stewart, W. H. Jr. and Roth, P. L. (2001) "Risk propensity differences between entrepreneurs and managers : A meta-analytic review," *Journal of Applied Psychology*, 86(1) : 145-153.
- Stewart, W. H. Jr., Watson, W. E., Carland, J. C., and Carland, J. W. (1999) "A proclivity for entrepreneurship : A comparison of entrepreneurs, small business owners, and corporate managers," *Journal of Business Venturing*, 14(2) : 189-214.
- Sy, T., Cote, S., and Saavedra, R. (2005) "The contagious leader : Impact of the leader's mood on the mood of group members, group affective tone, and group processes," *Journal of Applied Psychology*, 90(2) : 295-305.
- Van de Ven, A., Polley, D. E., Garud, R., and Venkataraman, S. (1999) *The innovation journey*, New York : Oxford University Press.
- Venkataraman, N. (1989 a) "Strategic orientation of business enterprises : The construct, dimensionality, and measurement," *Management Science*, 35(8) : 942-962.
- Venkataraman, N. (1989 b) "The concept of fit in strategy research : Toward verbal and statistical correspon-

- dence," *Academy of Management Review*, 14(3) : 423-444.
- Weick, K. E. (1979) *The social psychology of organizing*, Reading, MA : Addison-Wesley.
- Weick, K. E. (1995) *Sensemaking in organizations*, Thousand Oaks, CA : SAGE Publications.
- Willmott, H. (2008) "For informed pluralism, broad relevance and critical reflexivity," in Barry, D. and Hansen, E. eds., *The SAGE handbook of new approaches in management and organization*, London : SAGE Publications : 82-83.
- Zahra, S. A. (1993) "A conceptual model of entrepreneurship as firm behavior : A critique and extension," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 17(4) : 5-21.
- Zahra, S. A. and Covin, J. G. (1995) "Contextual influences on the corporate entrepreneurship performance relationship : A longitudinal analysis," *Journal of Business Venturing*, 10(1) : 43-58.